始

羅生門

君看雙眼色
不語似無愁

夏目漱石先生の靈前に獻す

夏目漱石先生の靈前に獻ず

羅生門

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りでない。舊記によると、佛像や佛具を打砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中が

その始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。——尤も今日は、刻限が遲いせいか、一羽も見えない。唯、所々、崩れ

かゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頬に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐるのである。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は、雨がやんでも格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、この衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適

當である。その上、今日の空模樣も少からずこの平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐた。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる遑はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。

さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に來る可き「盜人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちゞめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓へ上る、幅の廣い、之も丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちゞめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頰をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頰である。下人は、始め

から、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黃いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、ゆれながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の內を覗いて見た。

見ると、樓の內には、噂に聞いた通り、幾つかの屍骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狹いので、數は幾つともわからな

い。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあると云ふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その屍骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりしてごろごろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唖の如く默つてゐた。

下人は、それらの屍骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆悉この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其屍骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜

肌色の着物を著た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その屍骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の屍骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた屍骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づゝ抜きはじめた。髪は手に從つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに從つて下人の心からは、恐怖が少しづ

つ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た。――いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる悪に對する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。勿論下人は さつき迄自分が、盗人になる気でゐた事なぞは とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは 云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたやうに 飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が屍骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、から罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめから、わかつてゐる。下

人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、鷄の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。さあ何をしてゐた。云へ。云はぬと　これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は默つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が瞼の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く默つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうして、この意識は、今まではげしく燃えてゐた憎惡の心を何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯今時分、この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顏を見守つた。瞼の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた脣を、何か物でも噛んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髮を拔いてな、この女の髮を拔いてな、鬘にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、蟇のつぶやくやうな声で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

成程、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。しかし、かう云ふ死人の多くは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりである。現に、自分が今、髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云つて、太刀帯の陣へ売りに行つた。疫病にかゝつて死ななかつたなら、今でも売りに行つてゐたかもしれない。しかも、この女の売る干魚は、味がよいと云ふので、太刀帯たちが、缺かさず菜料に買つてゐたので

ある。自分は、この女のした事が悪いとは思はない。しなければ、饑死をするので、仕方がなくした事だからである。だから、又今、自分のしてゐた事も悪い事とは思はない。これもやはりしなければ、饑死をするので、仕方がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがひないと思ふからである。

——老婆は、大体こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持た大きな面皰を気にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さつき、門の下でこの男に缺けてゐた勇気である。さうして、又さつき、この門の上へ上つて、この老

捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盗人になるかに迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながらかう云つた。

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、屍骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。

——四年九月——

鼻

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顋の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から、内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは専念に當来の浄土を渇仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたから

であるが、内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとゞいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚔をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。――けれども之は内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたとは思つてゐない。内供の自尊心は、妻帶と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに出來てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。之は人の居ない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顏を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顏の位置を換へるだけでは、安心

が出來なくなつて、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却つて長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のやうにため息をついて不承不承に又元の經机へ、觀音經をよみに歸るのである。

それから又、内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講説などの屢行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。從つてこゝへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人々の顔を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼

には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣なぞは。見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。――しかし鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なると、内供の心は、一層不快になつた。内供が人と話しながら思はず、ぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさへ思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位、自分に

心細くなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆出來るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げてゐるのである。

所が或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を教はつて來た。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な

口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勸め出した。さうして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽從する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡單なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで來た。しかしぢかにこの提

へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

――もう茹つた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食ふやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々氣の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しなが

ら、こんな事を云つた。

――痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に皸のきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

――痛うはないて。

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいゝ位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出來はじめた。云はゞ毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたやうな形である。弟子の僧は

之を見ると、足を止めて獨り言のやうにかう云つた。

――之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らして頬をふくらせて、默つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が鼻の毛穴から、鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして

――もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

内供は矢張、八の字をよせたまゝ不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが惡るさうにおづおづ覗いて見た。

鼻は――あの顋の下まで下つてゐた鼻は、殆嘘のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上に意氣地なく殘喘を保つてゐる。所々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、滿足さうに眼をしばたゝいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはしないかと云ふ不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寢てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌々せずに、ぢろぢろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。それのみならず、嘗、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子なぞは、講堂の外で内供

と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、愼んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせいだと解釋した。しかしどうもこの解釋だけでは十分に說明がつかないやうである。――勿論、中童子や下法師が哂ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ哂ふにしても、鼻の長かつた昔とは、哂ふのにどことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのやうにつけつけとは哂はなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。そこで内供は、かう云ふ時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。――内供には、遺憾ながらこの問に答を与へる明が欠けてゐた。

――人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸をどうにかして切り抜ける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいやうな気にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが或敵意を、その人に対して抱くやうな事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなつた。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、痩せた尨犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃しながら、逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、した

ゝかその顔を打つた。木の片は以前の鼻持上げの木だつたのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて來た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寝つかうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むず痒いのに氣がついた。手をあてて見ると少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

――無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や橡が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明るい。塔の屋根には霜が下りてゐるせいであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、蔀を上げた椽に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覺が、再、内供に歸つて來たのは、この時である。

内供は慌てゝ鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顋の下まで、五六寸の長さにぶら下つてゐる、昔の鼻である。内供は鼻が一夜の中に、元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく歸つて來るのを感じた。

――かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

――[illegible]年一月――

父

父

自分が中學の四年生だつた時の話である。

その年の秋、日光から足尾へかけて、三泊の修學旅行があつた。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分發車……」かう云ふ箇條が、學校から渡す謄寫版の刷物に書いてある。

當日になると自分は、碌に朝飯も食はずに家をとび出した。電車でゆけば停車場まで二十分とはかゝらない。――さう思ひながらも、何となく心がせく。停留場の赤い柱の前に立つて、電車を待つてゐるうちも、氣が氣でない。

生憎、空は曇つてゐる。方々の工場で鳴らす汽笛の音が、鼠色の水蒸氣をふるはせたら、それが皆霧雨になつて、降つて來はしないかと思はれる。そ

の灰色の空の下で、高架鐵道を汽車が通る、被服廠へ通ふ荷馬車が通る。店の戸が一つづつ開く。自分のゐる停留場にも、もう二三人、人が立つた。それが皆、眠の足りなさうな顏を、陰氣らしく片づけてゐる。寒い。――そこへ割引の電車が來た。

こみ合つてゐる中を、やつと吊皮にぶらさがると、誰か後から、自分の肩をたたく者がある。自分は慌ててふり向いた。

「お早う」

見ると、能勢五十雄であつた。矢張、自分のやうに、紺のヘルの制服を着て、外套を卷いて左の肩からかけて、麻のゲエトルをはいて、腰に辨當の包やら水筒やらをぶらさげてゐる。

能勢は、自分と同じ小學校を出て、同じ中學校へはいつた男である。これと云つて、得意な學科もなかつたが、その代りに、これと云つて、不得意なものもない。その癖、ちよいとした事には、器用な性質で、流行唄と云ふやうなものは、一度聞くと、すぐに節を覺えてしまふ。さうして、修學旅行で宿屋へでも泊る晩なぞには、それを得意になつて披露する。詩吟、薩摩琵琶、落語、講談、聲色、手品、何でも出來た。その上又、身ぶりとか、顏つきとかで、人を笑はせるのに獨特な妙を得てゐる。從つて級の氣うけも、教員間の評判も、惡くはない。尤も自分とは、互に往來はしてゐながら、さして親しいと云ふ間柄でもなかつた。

「早いね、君も。」

「僕は何時も早いさ。」能勢はかう云ひながら、ちよいと小鼻をうごめかした。

「でもこの間は遲刻したぜ。」

「この間？」
「國語の時間にさ。」
「ああ、馬場に叱られた時か。」「あいつは弘法にも筆のあやまりさ。」能勢は、教員の名前をよびすてにする癖があつた。
「あの先生には、僕も叱られた。」
「生意氣でか？」
「いいえ、本を忘れて。」
「仁丹は、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云ふのは、能勢が馬場教諭につけた渾名である。――こんな話をしてゐる中に、停車場前へ來た。
乘つた時と同じやうに、こみあつてゐる中をやつと電車から下りて停車場へはいると、時刻が早いので、まだ級の連中は二三人しか集つてゐない。互

に「お早う」の挨拶を交換する。先を爭つて、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、何時ものやうに、勢よく饒舌り出した。皆「僕」と云ふ代りに、「己」と云ふのを得意にする年頃である。その自ら「己」と稱する連中の口から、旅行の豫想、生徒同志の品隲、教員の惡評などが盛に出た。
「泉はちやくいぜ、あいつは教員用のチョイスを持つてゐるもんだから、一度も下讀みなんぞをした事はないんだとさ。」
「平野はもつとちやくいぜ。あいつは、試驗の時と云ふと、歴史の年代をみんな爪へ書いて行くんだつて。」
「さう云へば先生だつてちやくいからな。」
「ちやくいとも。本間なんぞは receive の i と e と、どつちが先へ來るんだか、それさへ碌に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、

敢へてゐるぢやあないか。」
どこまでも、ちやくいて持ちきるばかりで一つも、碌な噂は出ない。すると、その中に能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を讀んでゐた、職人らしい男の靴を、バッキンレイだと批評した。これは當時、マッキンレイと云ふ新形の靴が流行つたのに、この男の靴は、一體に色澤を失つて、その上先の方がぱつくり口を開いてゐたからである。
「バッキンレイはよかつた。」かう云つて、皆一時に、失笑した。
それから、自分たちは、いい氣になつて、この待合室に出入するいろいろな人間を物色しはじめた。さうして一々、それに、東京の中學生でなければ云へないやうな、生意氣な惡口を加へ出した。さう云ふ事にかけて、ひけをとるやうな、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もゐない。中でも能勢

の形容が、一番辛辣で、且一番諧謔に富んでゐた。
「能勢、能勢、あのお上さんを見ろよ。」
「あいつは河豚が孕んだやうな顔をしてゐるぜ。」
「こつちの赤帽も、何かに似てゐるぜ。ねえ能勢。」
「あいつはカロロ五世さ。」
しまひには、能勢が一人で、惡口を云ふ役目をひきうけるやうな事になつた。
すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立つて、細い數字をしらべてゐる妙な男を發見した。その男は羊羹色の背廣を着て、體操に使ふ球竿のやうな細い脚を、鼠の縞のズボンに通してゐる。縁の廣い昔風の黒い中折れの下から、半白の毛がはみ出してゐる所を見ると、もう可成な年配

らしい。その襟頸のまはりには、白と黒と格子縞の派手なハンケチをまきつけて、鞭かと思ふやうな、寒竹の長い杖をちよいと脇の下へはさんでゐる。服装と云ひ、態度と云ひ、すべてが、パンチの挿絵を切抜いて、そのままこれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思はれない。——自分たちの一人は、又新しく悪口の材料が出来たのを喜ぶやうに、肩でおかしさうに笑ひながら、能勢の手をひつぱつて、

「おい、あいつはどうだい。」とかう云つた。

すると、自分たちは、皆その男を見た。男はその時少し反り身になりながら、チヨツキのポケツトから、紫の打紐のついた大きなニツケルの懐中時計を出して、時計の針と時間表の数字とを見比べてゐる。横顔だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云ふ事を知つた。

しかし、そこにゐた自分たちの連中には、一人もそれを知つてゐる者がない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適当に形容する語を聞かうとして、聞いた後の笑ひを用意しながら、面白さうに能勢の顔を窺つてゐた。中学の四年生には、その時の能勢の心もちを推測する明がない。自分は危く「あれは能勢の父だぜ。」と云はうとした。

すると、その時、

「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」

かう云ふ能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云ふ迄もない。中にはわざわざ反り身になつて、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿を真似て見る者さへある。自分は、思はず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けてゐたからである。

「そいつは適評だな。」
「見ろ。見ろ。あの帽子を。」
「日かげ町か。」
「日かげ町にだつてあるものか。」
「おやあ博物館だ。」
能勢が又、面白さうに笑つた。
露天の停車場は、日の暮のやうにうす暗い。自分は、そのうす暗い中で、
そつとそのロンドン乞食の方をすかして見た。
すると、何時の間にか、うす日がさし始めたと見えて、幅の狭い光の帶が
高い天井の明り取りから、斜にさしてゐる。能勢の父親は、丁度その光
の帶の中にゐた。周圍では、すべての物が動いてゐる。眼のとどく所で
も、とどかない所でも動いてゐる。さうして又その運動が、聲とも音ともつ
かないものになつて、この大きな建物の中を霧のやうに蔽つてゐる。しかし
能勢の父親だけは動かない。この現代と縁のない洋服を着た、この現代と縁
のない老人は、めまぐるしく動く人間の洪水の中に、これもやはり現代を超
越した、黒の中折をあみだにかぶつて、紫の打紐のついた懐中時計を右の掌
の上にのせながら、依然としてポンプの如く時間表の前に佇立してゐるので
ある。……

あとで、それとなく聞くと、その頃大學の藥局に通つてゐた能勢の父親は
能勢が自分たちと一しよに修學旅行に行く所を、出勤の途すがら見ようと思
つて、自分の子には知らせずに、わざわざ停車場へ來たのださうである。

能勢五十雄は、中學を卒業すると間もなく、肺結核に罹つて、物故した。その追悼式を、中學の圖書室で擧げた時、制帽をかぶつた能勢の寫眞の前で悼辭を讀んだのは、自分である。――君、父母に孝に――自分はその悼辭の中に、かう云ふ句を入れた。

猿

猿

私が、遠洋航海をすませて、やつと半玉（軍艦では、候補生の事をかう云ふのです）の年期も完らうと云ふ時でした。私の乗つてゐたAが、横須賀へ入港してから、三日目の午後、彼是三時頃でしたらう。勢よく、上陸員整列の喇叭が鳴つたのです。確、右舷が上陸する順番になつてゐたと思ひますが、それが皆、上甲板へ整列したと思ふと、今度は、突然、総員集合の喇叭が鳴りました。勿論、唯事ではありません。何にも事情を知らない私たちは、艙口を上りながら、互に「どうしたのだらう」と云ひ交はしました。

さて、総員が集合して見ると、副長がかう云ふのです。「……本艦内で、近頃、盗難に罹つた者が、二三ある。殊に、昨日、町の時計屋が来た際にも、

銀側の懷中時計が、二個、紛失したと云ふ事であるから、今日はこれから、總員の身體檢査を行ひ、同時に、所持品の檢査も行ふ事にする。」大體、こんな意味だつたと思ひます。時計屋の一件は、初耳ですが、盜難に罹つた者があるのは、僕たちも知つてゐました。何でも、兵曹が一人に、水兵が二人で、皆、金をとられたと云ふ事です。

身體檢査をうけるのは、勿論、皆、裸にさせられるのですが、丁度、十月の始め港内に碇泊してゐる赤い浮標に日がかんかん照りつけるのを見ると、まだ、夏らしい氣がする時分なので、これは、さう大して苦にもならなかつたやうですが、弱つたのは、上陸早々、遊びに行く氣でゐた連中で、檢査をされると、ポケットから春畫が出る、サックが出ると云ふ騷ぎです。顏を赤くして、もおもおしたつて、追付きません。何でも、二三人は、士官に擲られ

たやうでした。

何しろ、總員六百人もあるのですから、一通り檢査をするにしても、手間がとれます。奇觀と云へば、まああの位、奇觀はありますまい。六百人の人間が皆、裸で、上甲板一杯に、並んでゐるのですから。その中でも、顏や手首の黑いのは、機關兵で、この連中は、今度の盜難に、一時嫌疑をかけられた事があるものですから、猿股までぬいて、檢べるのなら、どこでも檢べてくれと云ふ、恐ろしいやうな權幕です。

上甲板で、かう云ふ騷ぎが、始まつてゐる間に、中甲板や下甲板では、所持品の檢査が、[illegible]、候補生が配當してありますから、上甲板の連中は、勿論、下へは一足でもはいれません。私は、丁度、その中下甲板の檢査をする役に當つたので、外の仲間と一しよに、兵

員の衣嚢から手箱からを檢査して歩きました。こんな事をするのは軍艦に乗つてから、まだ始めてでしたが、ハムモツクの網を探すとか、衣嚢をのせてある棚の奥をかきまはすとか、思つたより、面倒な仕事です。その中に、やつと、私と同じ候補生の牧田と云ふ男が、贓品を見つけました。時計も金も一つになつて、奈良島と云ふ信號兵の帽子の箱の中に、あつたのです。その外にまだ給仕がなくなしたと云ふ、青貝の柄のナイフも、はいつてゐたと云ふ事でした。

そこで、「解散」から、すぐに「信號兵集れ」と云ふ事になりました。外の連中は悦んだの、悦ばないのではありません。殊に、機關兵などは、前に疑はれたと云ふ廉があるものですから、大へんな嬉しがりやうでした。――所が集つた信號兵を見ると、奈良島がゐません。

私は、まだ無經驗だつたので、さう云ふ事は、まるで知りませんでしたが、軍艦では贓品が出ても、犯人の出ないと云ふ事が、時々あるのださうです。勿論、自殺をするのですが、十中八九は、石炭庫の中で、首を縊るので、投身するのは、殆、ありません。尤も、一度、私の軍艦では、ナイフで腹を切つたのがゐたさうですが、これは死に切れない中に、發見されて命だけはとりとめたと云ふ事でした。

さう云ふ事が、あるものですから、奈良島が見えないと云ふと、將校連も流石に、ぎよつとしたやうでした。殊に、今でも眼についてゐるのは、副長の慌て方で、この前の戰爭の時には、隨分、勇名を轟かせた人ださうですが、その顏色を變へて、心配した事と云つたら、はた眼にも、笑止な位です。私たちは皆、それを見ては、互に、輕蔑の眼を交はしてゐました。ふだん精神

[illegible]の持ち物と云ふ事に、あの[illegible]だつたと云ふ、[illegible]があつたので
す。

そこで、すぐに、副長の命令で、艦内の捜索が始まりました。さうなると一種の愉快な興奮に驅られるのは、私一人に限つた事ではないでせう。火事を見にゆく野次馬のこゝろもち、丁度、あれなのです。巡査が犯人を逮捕にゆくとなると向うが抵抗するかも知れないと云ふ不安があるでせうが、軍艦の中ではそんな事は、萬々ありません。殊に、私たちと水兵との間には、上下の區別と云ふものが、厳として、――軍人になつて見なければ、わからない程、厳としてあるのですから、それが、非常な強味です。私は、殆、雀躍して、艙口をかけ下りました。

丁度、その時、私と一しよに、下へ來た連中の中に、牧田がゐましたが、

これも、面白くつてたまらないと云ふ顔で、後から、私の肩をたたきながら
「おい、猿をつかまへた時の事を、思出すな。」
と云ふのです。
「うん、今日の猿は、あいつ程、敏捷でないから、大丈夫だ。」
「[illegible]、高を括つてゐると、逃げられるぞ。」
「なに、逃げたつて、猿は猿だ」

こんな冗談を云ひながら、下へ下りました。

この猿と云ふのは、遠洋航海で、オオストラリアへ行つた時に、ブリスベインで、砲術長が、土人から買つて來た、猿の事です。それが、航海中、ウイルヘルムス、ハアフエンへ入港する二日前に、艦長の時計を持つたなり、どこかへ行つてしまつたので、軍艦が大騒ぎになりました。一つは、永の航海

て、無闇に暴れまはつたと云ふ事もあるのですが、當の砲術長はもとより、私たちも總出で、作業服のまま、下は機關室から上は砲塔まで、さがして歩く——一通りの混雜ではありませんでした。それに、外の連中の買つたり、貰つたりした動物が、澤山あるので、私たちが驅けて歩くと、犬が足にからまるやら、インコが鳴き出すやら、ロオプに吊つてある籠の中で、鸚哥が、氣のちがつたやうに、羽搏きをするやら、まるで、曲馬小屋で、火事でも始まつたやうな體裁です。その中に、猿の奴め、どこをどうしたか、急に上甲板へ出て來て、時計を持つたまま、いきなりマストへ、驅け上らうとしました。丁度そこには、水兵が二三人仕事をしてゐたので勿論、逃がしつこはありませんすぐに、一人が、頸すぢをつかまへて、難なく、手捕りにしてしまひました時計も、硝子がこはれた丈で、大した損害もなくてすんだのです。あとで猿は

砲術長の發案で、滿一日、絶食の懲罰をうけたのですが、滑稽ではありませんか、その期間が切れない中に、砲術長自身、罰則を破つて、猿に、人參や芋を、やつてしまひました。さうして「しよげてゐるのを見ると、猿にしても、可哀さうだからなあ」と、かう云ふのです。これは、餘事ですが、實際奈良島をさがして歩く私たちの心もちは、この猿を追ひかけた時の心もちと可成よく似てゐました

私は、その時、一番先に、下甲板へ下りました。御承知でせうが、下甲板は、いやにうす暗いものです。その中で、磨いた金具や、ペンキを塗つた鐵板が、あちらこちらに、ぼんやりと、光つてゐる。——何だか妙に息がつまるやうな氣がして、仕方がありません。そのうす暗い中を、石炭庫の方へ二足三足、歩いたと思ふと、私は、もう少しで、聲を出して、叫びさうになり

ました。――石炭庫の積入口に、人間の上半身が出てゐたからです。今、その狹い口から、石炭庫の中へ、はいらうと云ふので、足を先へ、入れて見た所なのでせう。こつちからは、紺の水兵服の肩と、帽子とに遮られて、顔は誰ともわかりません、それに、光が足りないので、唯、その上半身の黒くうき出してゐるのが、見えるだけです。が、直覺的に、私は、それを、奈良島だと思ひました。さうだとすれば、勿論、自殺をするつもりで、石炭庫へはいらうと云ふのです。

私は、異常な興奮を感じました。體中の血が躍るやうな、何とも云ひやうのない、愉快な興奮です。銃を手にして、待つてゐた獵師が、獲物の來るのを見た時のやうな心もちとでも、云ひませうか。私は、殆、夢中で、その男にとびかかりました。さうして、獵犬よりもすばやく、兩手で、その男の肩

をしつかり、上からおさへました。

「奈良島。」

叱るとも、罵るともつかずに、かう云つた私の聲は、妙に上ずつて、顫へてゐました。それが、實際、犯人の奈良島だつた事は云ふまでもありません。

「……」

奈良島は私の手をふり離すでもなく、上半身を積入口から出したまま、靜に、私の顔を見上げました。「靜に」と云つたのでは、云ひ足りません。あるだけの力を出しきつて、しかも靜でなければならない「靜に」です。餘裕のないせつぱつまつた、云はばあの半ば吹き折られた帆桁が、風のすぎた後で、僅に殘つてゐる力をたよりに、元の位置へ返らうとする、止むを得ない「靜に」です。私は、無意識ながら豫期してゐた抵抗がなかつたので、或不滿に似た感

情を抱きながら、しかも、その爲に、一層、いらいらした腹立たしさを感じながら、默つて、その「靜に」もたげた顔を見下しました。
　私は、あんな顔を、二度と見た事はありません。惡魔でも、一目見たら、泣くかと思ふやうな顔なのです。かう云つても、實際、それを見ないあなたには、とても、想像がつきますまい。私は、あなたに、あの涙ぐんでゐる眼を、お話しする事は、出來るつもりです。あの急に不隨意筋に攣つたやうな口角の筋肉の痙攣も、或は、察して頂く事が出來るかも知れません。それから、あの汗ばんだ、色の惡い顔も、それだけなら、容易に、説明が出來ませう。が、それらのすべてから來る、恐しい表情は、どんな小説家も、書く事は出來ますまい。私は、小説をお書きになるあなたの前でも、安心して、これだけの事は、云ひきれます。私はその表情が、私の心にある何物かを、稻妻

のやうに、たゝき壞したのを感じました。それ程、この信號兵の顔が、私に、強いショックを與へたのです。
「貴樣は何をしようとしてゐるのだ。」
　私は、機械的にかう云ひました。すると、その「貴樣」が、私のせゐか、私自身を指してゐる樣に聞えるのです。「貴樣は何をしようとしてゐるのだ」。——かう訊ねられたら、私は何と答へる事が出來るのでせう。「己は、この男を罪人にしようとしてゐるのだ。」誰が安んじて、さう答へられます。誰が、この顔を見てこんな事件が出來ます。かう書くと、長い間の事のやうですが、實際は、唯、一刹那の中に、これ程の自責が、私の心に閃きました。丁度、その時です、「面目ございません」——かう云ふ語が、かすかながら鋭く、私の耳にはいつたのは。あなたなら、私自身の心が、私に云つたやうに聞えたとで

も、形容なさるのでせう。私は、唯、その語が、針を打つたやうに、私の神経へひゞくのを感じました。まつたく、その時の私の心もちは、奈良島と一しよに「面目ございません」と云ひながら、私たちより大きい、何物かの前に首がさげたかつたのです。私は、いつか、奈良島の肩をおさへてゐた手をはなして、私自身が捕へられた犯人のやうに、ぼんやり石炭庫の前に立つてゐました。

後は、お話しせずとも、大概お察しがつきませう。奈良島は、その日一日禁錮室に監禁されて、翌日、浦賀の海軍監獄へ送られました。これは、あんまりお話したくない事ですが、あすこでは、囚人に、よく「弾丸運び」と云ふ事をやらせるのです。八尺程の距離を置いた臺から臺へ、五貫目ばかりの鐵の丸を、繰返へし繰返へし、置き換へさせるのですが、何が苦しいと云つ

て、あの位、囚人に苦しいものはありますまい。いつか、拝借したドストエフスキイの「死人の家」の中にも、「甲のバケツから、乙のバケツへ水をあけて、その水を又、甲のバケツへあけると云ふやうに、無用な仕事を何度となく反覆させると、その囚人は必自殺する」　こんな事が、書いてあつたと思ひます。それを、實際、あすこの囚人はやつてゐるのですから、自殺をするもののないのが、寧、不思議な位でせう。そこへ行つたのです、私の取押さへたあの信號兵は。雀斑のある、背の低い、氣の弱さうな、おとなしい男だつたのですが……

その日、私は、外の候補生仲間と、ハンドレエルによりかゝつて、日の暮れかゝる港を見てゐますと、例の牧田が私の隣へ來て、「猿を生捕つたのは、大手柄だな」と、ひやかすやうに、云ひました。大方、私が、内心得意でゝも

もあると思つたのでせう。

「奈良島は人間だ。猿ぢやあない。」

私は、つゝけんどんと、かう云つて、ふいとハンドレエルを離れてしまひました。外の連中は、不思議がつたのに違ありません。牧田と私とは、兵學校以來の親友で、議論一つした事がないのですから。

私は、獨りで、上甲板を、艦尾から艦首へ歩きながら、奈良島の生死を氣づかつた副長の狼狽した容子をなつかしく思ひ出しました。私たちが、あの信號兵を、猿扱ひにしてゐた時でも、副長だけは、同じ人間らしい同情を持つてゐたのです。それを、輕蔑した私たちの莫迦さかげんは、完くお話しにならないのです。私は、妙にきまりが惡くなつたので、頭を下げました。さうして、出來るだけ、靴の音がしないやうに、暗くなりかけた甲板を、又艦首へ引返しました。禁錮室にゐる奈良島に、私たちの靴のいゝ、靴の音を聞かせるのが、すまないやうな氣がしたからです。

奈良島が盗みをしたのは、やはり女のためだと云ふ事でした。刑期は、どの位だか、知りません。兎に角、少くとも、何ヶ月かは、暗い所へはいつてゐたのでせう。猿は懲罰をゆるされても、人間はゆるされませんから。

五年八月——

孤獨地獄

孤獨地獄

この話を自分は母から聞いた。母はそれを自分の大叔父から聞いたと云つてゐる。話の眞僞は知らない。唯大叔父自身の性行から推して、かう云ふ事も隨分ありさうだと思ふだけである。

大叔父は所謂大通の一人で、幕末の藝人や文人の間に知己の數が多かつた。河竹默阿彌、柳下亭種員、善哉庵永機、同冬映、九代目團十郎、宇治紫文、都千中、乾坤坊良齋などの人々である。中でも默阿彌は、「江戸櫻清水清玄」で紀國屋文左衞門を書くのに、この大叔父を粉本にした。物故してから、もう彼是五十年になるが、生前一時は今紀文と綽號された事があるから、今でも名だけは聞いてゐる人があるかも知れない。――姓は細木、名は藤次郎、

俗名は香以、俗稱は山城河岸の津藤と云つた男である。
その津藤が或時吉原の玉屋で、一人の僧侶と近づきになつた。本郷界隈の或禪寺の住職で、名は禪超と云つたさうである。それがやはり嫖客となつて、玉屋の錦木と云ふ華魁に馴染んでゐた。勿論、肉食妻帶が僧侶に禁ぜられてゐた時分の事であるから、表向きはどこまでも出家ではない。黄八丈の着物に黑羽二重の紋付と云ふ拵へで、人には醫者だと稱してゐる。――それと偶然近づきになつた。
偶然と云ふのは燈籠時分の或夜、玉屋の二階で、津藤が厠へ行つた歸りしなに何氣なく廊下を通ると、欄干にもたれながら、月を見てゐる男があつた。坊主頭の、どちらかと云ふと背の低い、痩ぎすな男である。津藤は、月あかりで、これを出入の太鼓醫者竹内だと思つた。そこで、通りすぎながら、手をのばして、ちよいとその耳を引張つた。驚いてふり向く所を笑つてやらうと思つたからである。
所がふり向いた顏を見ると、反て此方が驚いた。坊主頭と云ふ事を除いたら、竹内と似てゐる所などは一つもない。――額の廣い割に、眉と眉との間が險しく狹つてゐる。眼の大きく見えるのは、肉の落ちてゐるからであらう。左の頰にある大きな黑子は、その時でもはつきりと見えた。その上顴骨が高い。――これだけの顏かたちが、とぎれとぎれに、慌しく津藤の眼にはいつた。
「何か御用かな。」その坊主は腹を立てたやうな聲でかう云つた。いくらか酒氣も帶びてゐるらしい。
前に書くのを忘れたが、その時津藤には藝者が一人に幇間が一人ついてゐ

た。この手合は津藤をあやまらせて、それを默つて見てゐるわけには行かない。そこで幇間が、津藤に代つて、その客に疎忽の詫をした。さうしてその間に、津藤は藝者をつれて、匆々自分の座敷へ歸つて來た。いくら大通でも間が惡かつたものと見える。坊主の方では、幇間から間違の仔細をきくと、すぐに機嫌を直して大笑ひをしたさうである。その坊主が禪超だつた事は云ふまでもない。

その後で、津藤が菓子の臺を持たせて、向ふへ詫びにやる。向ふでも氣の毒がつて、わざわざ禮に來る。それから二人の交情が結ばれた。もつとも結ばれたと云つても、玉屋の二階で遇ふだけで、互に往來はしなかつたらしい。津藤は酒を一滴も飲まないが、禪超は寧、大酒家である。それからどちらかと云ふと、禪超の方が持物に贅をつくしてゐる。最後に女色に沈湎するのも、

やはり禪超の方が甚しい。津藤自身が之をどちらが出家だかわからないと批評した。――大兵肥滿で、容貌の醜かつた津藤は、五分月代に銀鎖の懸守りと云ふ姿で、平素は好んでめくら縞の着物に白木の三尺をしめてゐたと云ふ男である。

或日津藤が禪超に遇ふと、禪超は錦木のしかけを羽織つて、三味線をひいてゐた。日頃から血色の惡い男であるが、今日は殊によくない。眼も充血してゐる。彈力のない皮膚が時々口許で痙攣する。津藤はすぐに何か心配があるのではないかと思つた。自分のやうなものでも相談相手になれるなら是非きかせて頂きたい――さう云ふ口吻を洩らして見たが、別にこれと云つて打明ける事もないらしい。唯、何時もよりも口數が少くなつて、ややもすると談柄を失しがちである。そこで津藤は、これを嫖客のかかりやすい倦怠だと解

釈した。酒色を恣にしてゐる人間がかかつた倦怠は、酒色で癒る筈がない。かう云ふはめから、二人は何時になくしんみりした話をした。すると禅超は急に何か思ひ出したやうな容子で、こんな事を云つたさうである。

　仏説によると、地獄にもさまざまあるが、凡先づ、根本地獄、近辺地獄、孤独地獄の三つに分つ事が出来る。南瞻部洲下過五百踰繕那乃有其獄と云ふ句があるから、大抵は昔から地下にあるものとなつてゐるらしい。唯、その中で孤独地獄だけは、山間曠野樹下空中、何処へでも忽然として現れる。云はば目前の境界が、すぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前するのである。自分は二三年前から、この地獄へ堕ちた。一切の事が少しも永続した興味を与へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を変へずにゐれば猶、苦し

い思をする。そこでやはり転々としてその日その日の苦しみを忘れるやうな生活をしてゆく。しかし、それもしまひには苦しくなるとすれば(かう云つて禅超は口許の筋肉を引きつらせながら、泣くやうな顔をして笑つた。)死んでしまふより外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だつた。今では……

　最後の句は、津藤の耳にはいらなかつた。禅超が又三味線の調子を合せながら、低い声で云つたからである――それ以来、禅超は玉屋へ来なくなつた。誰も、この放蕩三昧の禅僧がそれからどうなつたか、知つてゐる者はない。唯その日禅超は、錦木の許へ金剛経の疏抄を一冊忘れて行つた。津藤が後年零落して、下総の寒川へ閑居した時に常に机上にあつた書籍の一つはこの疏抄である。津藤はその表紙の裏へ「菫野や露に気のつく年四十」と、自作の句を書き加へた。その本は今では残つてゐない。句ももう覚えてゐる人は

運

一人もなからう。

安政何年頃の話である。禅超は地獄と云ふ語の興味で、この話を覚えてゐたものらしい。

一日の大部分を書斎で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禅僧とは、全然沒交渉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は徳川時代の戯作や浮世繪に、特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかも自分の中にある或心もちは、動もすれば孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、或意味で自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。

（五年二月）

運

目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往來の容子は仕事場にゐても、よく見えた。清水へ通ふ往來は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺裝束をした女が通る。その後からは、めづらしく、黄牛に曳かせた網代車が通つた。それが皆、疎な簾の目を、右からも左からも、來たかと思ふと、通りぬけてしまふ。その中で變らないのは、午後の日が暖に春を炙つてゐる、狹い往來の土の色ばかりである。

その人の往來を、仕事場の中から、何と云ふ事もなく眺めてゐた、一人の青侍が、この時、ふと思ひついたやうに、主の陶器師へ聲をかけた。

「相不變、觀音樣へ參詣する人が多いやうだね。」

「左樣さ。」
陶器師は、仕事に氣をとられてゐたせいか、少し迷惑さうに、かう答へた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、何處かひやうきんな所のある老人で、顏つきにも容子にも、惡氣らしいものは、微塵もない。着てゐるのは、麻の帷子であらう。それに萎えた揉烏帽子をかけたのが、此頃評判の高い鳥羽僧正の繪卷の中の人物を見るやうである。
「私も一つ、日參でもして見ようか。かう、うだつが上らなくつちや、やりきれない。」
「御冗談で。」
「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だつて、信心をするよ。日參をしたつて、參籠をしたつて、さうとすれば、安いものだからね。つまり、神

佛を相手に、一商賣をするやうなものさ。」
靑侍は、年相當な上調子なもの言ひをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。竹藪を後にして建てた、藁葺きのあばら家だから、中は鼻がつかへる程狹い。が、簾の外の往來が、目まぐるしく動くのに引換へて、此處では、甕でも瓶子でも、皆素燒の肌を、のどかな春風に吹かせながら、百年も昔からさうしてゐたやうに、ひつそりと靜まつてゐる。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さへも巣を食はないらしい。……
翁が返事をしないので、靑侍は又語を繼いだ。
「お爺さんなんぞも、この年までには、隨分いろんな事を、見たり聞いたりしたらうね。どうだい。觀音樣は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左樣さ。昔は折々、そんな事もあつたやうに聞いてゐます。」
「どんな事があつたね。」
「どんな事と云つて、さう一口には云へませんがな。――しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもありますまい。」
「可哀さうに、これでも少しは信心氣のある男なんだぜ。愈々運が授かるとなれば、明日にも――」
「信心氣ですかな。商賣氣ですかな。」
翁は、眦に皺をよせて笑つた。捏ねてゐた土が、壺の形になつたので、やつと氣が樂になつたと云ふ調子である。
「神佛の御考へなどゝ云ふものは、貴方がたの御年では、中々わからないものですよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだね。」
「いやさ。神佛が運をお授けになる、ならないと云ふ事ぢやありません。そのお授けになる運の善し惡しと云ふ事がな。」
「だつて、授けて貰へばわかるぢやないか。善い運だとか、惡い運だとか。」
「それが、どうも貴方がたには、わかり兼ねませうて。」
「私には運の善し惡しより、さう云ふ理窟の方が、わからなさうだね。」
日が傾き出したのであらう。さつきから見ると、往來へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物賣りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい櫻の枝を持つてゐた。
「今、西の市で、績麻の店を出してゐる女なぞを聞くとよくわかります

かな。」
「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつてゐるぢやないか。」
二人は、暫くの間、黙つた。青侍は、爪で頤のひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めてゐる。貝殻のやうに白く光るのは、大方さつきの桜の花がこぼれたのであらう。
「話さないかね。お爺さん。」
やがて、眠むさうな声で、青侍が云つた。
「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しませうか。又、何時もの昔話ですがな。」
かう前置きをして、陶物師の翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないやうな、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もう彼是三四十年前になりませう。あの女がまだ娘の時分に、この清水の観音様へ、願をかけた事がありました。どうぞ一生安楽に暮せますやうにと云ひましてな。何しろ、その時分は、あの女もたつた一人のおふくろに死別れた後で、それこそ日々の暮しにも差支へるやうな身の上でしたから、さう云ふ願をかけたのも、満更無理はありません。
「死んだおふくろと云ふのは、もと白朱社の巫子で、一しきりは大さう流行つたものですが、狐を使ふと云ふ噂を立てられてからは、めつきり人が来なくなつてしまつたやうです。これが又、白あばたの、年に似合はず水々しい大がらな婆さんでしてな、何さま、あの容子おや、狐どころか男でも……」
「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺ひたいね。」
「いや、これは御挨拶で。——、そのおふくろが死んだので、後は娘一人の

痩せ腕ですから、いくらかせいでも、暮しの立てられやうがありません。そこで、容貌もよければ、利発者の娘が、お籠りをするのにも、襤褸故に、あたりへ気がひけると云ふ始末です。」
「へえ、そんなに好い女だつたかい。」
「左様さ。気だてと云ひ、顔と云ひ、手前の欲目では、先どこへ出しても、恥しくないと思ひましたがな。」
「惜しい事に、昔さね。」
青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云ふ。翁は、笑声を鼻から抜いて、又ゆつくり話しつづけた。後の竹藪では、頻に鶯が啼いてゐる。
「それが、三七日の間、御籠りをして、今日が満願と云ふ夜に、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂に詣つてゐた連中の中に、背むしの坊主が一人ゐて、そいつが何か陀羅尼のやうなものを、くどくど誦してゐたさうですがな。大方それが、気になつたせいでせう。うとうと眠気がさしても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれません。とんと、縁の下で蚯蚓でも鳴いてゐるやうな心もちなのです。すると、その声が、何時の間にやら人間の語になつて、「ここから帰る路で、そなたに云ひよる男がある。その男の云ふ事を聞きなされ」　と、かう聞えると云ふのですな。
「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧です。が、何と云つてゐるのだか、いくら耳を澄ましても、わかりません。その時、何気なく、ひよいと向ふを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃拝みなれた、端厳微妙の御顔ですが、それを見ると、不思

夢にも又耳もとで、「その男の云ふ事を聞きなされ」と、誰だか云ふやうな氣がしたさうです。そこで、娘はそれを觀音樣の御告だと、一圖に思ひこんでしまひました。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五條へくだらうとしますと、案の定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でしたが、生憎の暗で、相手の男の顔も見えなければ、着てゐる物などは、猶更わかりません。唯、ふり離さうとする拍子に、手が向うの口髭にさはりました。いやはや、とんだ時が、滿願の夜に當つたものです。」

「その上、相手は、名を訊かれても、名を云ひません。所を訊かれても、所を云ひません。唯、云ふ事を聞けと云ふばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱

きすくめたまゝ、引きずるやうにして、つれて行きます。泣かうにも、喚かうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がありません。」

「はゝあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩は其處ですごしたさうです。――もしその後の事なら、年よりの手前よりは、貴方がたの方がよく御存知でせう。」

翁は、又眼に皺をよせて、笑つた。往來の影は、愈々長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであらう。其處此處に散つてゐる櫻の花も、何時の間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、點々と白い色をこぼしてゐる。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思ひ出したやうに、頤のひげを拔き拔き、かう云つた。

「それで、もうおしまひかい。」

「これだけなら、何もわざわざお話し申すがものはありません。」翁は、やはり嶽をいぢりながら「夜があけると、その男が、かうなるのも大方宿世の縁だらうから、とてもの事に夫婦になつてくれと云ふのださうです。」

「成程」

「夢の御告げでもないなら、兎も角、娘は、觀音樣のお思召し通りになるのだと思つたものですから、とうとう首を竪にふりました。さて形ばかりの盃事をすませると、先、當座の用にと云つて、塔の奥から出して來てくれたのが綾を十疋に絹を十疋です。——この眞似ばかりは、貴方にもちとむづかしいかも知れませんな。」

青侍は、にやにや笑ふばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮に歸ると云つて、娘一人を留守居に、慌しく何處かへ出て行きました。その後の淋しさは、又一倍です。いくら利發者でも、かうなると、流石に心細くなるのでせう。そこで、心晴らしに、何氣なく塔の奥へ行つて見ると、どうです、綾や絹は愚な事、珠玉とか砂金とか云ふ金目の物が、皮匣に幾つとなく、並べてあると云ふぢやありませんか。これにはあゝ云ふ氣丈な、娘でも、思はず吐胸をついたさうです。

「物にもよりますが、こんな財物を持つてゐるからは、もう疑はありません引剝でなければ、物盗りです。——さう思ふと、今までは唯、さびしいだけだつたのが、急に、怖いのも手傳つて、何だか片時も此處にかうしては、ゐ

られないやうな氣になりました。何さま、恐く放免の手にでもかゝらうものなら、どんな目に遇ふかも知れません。

そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返さうとしますと、誰だか、皮匣の後から、しはがれた聲で呼びとめました。何しろ、人はゐないとばかり思つてゐた所ですから、驚いたの驚かないのぢやありません。見ると、人間とも海鼠ともつかないやうなものが、砂金の袋を積んだ中に、圓くなつて、坐つてゐます。——これが目くされの、皺だらけの、腰のまがつた背の低い、六十ばかりの尼法師でした。娘の思惑を知つてか、知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫聲で、初對面の挨拶をするのです。

こつちは、それ所の騒ぎではないのですが、何しろ逃げようと云ふ巧みを

けどられなどしては大變だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女か何かつとめてゐたらしいのです。が、男の商賣の事になると、妙に一口も話しません。それさへ、娘の方では、氣になるのに、その尼が又、少し耳が遠いと來てゐるものですから、一つ話を何度となく、云ひ直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出したい程、氣がおれます。——

そんな事が、彼是午までつゞきましたらう。すると、やれ清水の櫻が咲いたの、やれ五條の橋普請が出來たのと云つてゐる中に、幸、年の加減か、この婆さんが、そろ〳〵居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はか〴〵しくなかつたせいもあるのでせうがな。そこで、娘は、折を計つて、相手の寢息

を窺ひながら、そつと入口まで這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いゝ案配に、人のけはひはありません。――

「此處でそのまゝ、逃げ出してしまへば、何の事もなかつたのですが、ふと今朝貰つた綾と絹との事を思ひ出したので、それを取りに、又そつと皮匣の所まで歸つて來ました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまづいて思はず手が婆さんの膝にさはつたから、たまりません。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くは唯、あつけにとられて、ゐたやうですが、急に氣ちがひのやうになつて、娘の足にかじりつきました。さうして、半分泣き聲で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、耳へはいる所では、萬一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇ふかも知れないと、かう云つてゐるらしいのですな。が、こつちも此處にゐては命にかゝはると云ふ時ですから元

より、そんな事に耳をかす譯がありません。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ、蹴る、砂金の袋をなげつける、――梁に巣を食つた鼠も、落ちさうな騒ぎです。それに、かうなると、死物狂ひだけに、婆さんの力も、莫迦には出來ません。が、そこは年のちがひでせう、間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかゝへて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には尼はもう、口もきかないやうになつてゐました。これは、後で聞いたのですが、屍骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまゝ、薄暗い隅の方に、仰向けになつて、臥てゐたさうです。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、流石に氣がさしたと見えて、五條京極邊の知人の家をたづねました。この知人と云ふのも、その日暮しの

貧乏人なのですが、絹の一疋もやつたからでせう、湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろ〳〵経營してくれたさうです。そこで、娘も漸く、ほつと一息つく事が出來ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍は、帶にはさんでゐた扇を抜いて、簾の外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒々しく笑ひ興じながら、通りすぎたが、影はまだ往來に殘つてゐる。……

「ぢやそれで愈〻けりがついたと云ふ譯だね。」

「所が」翁は大仰に首を振つて、「その知人の家にゐますと、急に往來の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵りあふ聲が聞えます。何しろ、後暗い體ですから、娘は又、胸を痛めました。あの物盗りが仕返し

にでも來たものか、さもなければ、檢非違使の追手がかゝりでもしたものか、――さう思ふともう、おち〳〵、粥を啜つてもゐられません。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看督長が一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかゝつた男が一人、所々裂けた水干を着て、烏帽子もかぶらず、曳かれて行きます。どうも物盗りを捕へて、これからその住家へ、實録をして行く所らしいのですな。

「しかも、その物盗りと云ふのが、昨夜、五條の坂で云ひよつた、あの男だらうぢやありませんか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて來たさうです。これは、當人が、手前に話しました　何も、その男に惚れてゐた

の、どうしたのと云ふ訳ぢやない。が、その縫目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいぢらしくなつて、思はず泣いてしまつたと、まあ云ふのですがな。まことその話を聞いた時には手前もつくづくさう思ひましたよ——」

「何とね。」

「観音様へ願をかけるのも考へ物だとな。」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやつて行けるやうになつたのだらう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になつてゐます。その綾や絹を売つたのを本にしましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがへになりません。」

「それなら、その位な目に遭つても、結構ぢやないか。」

外の日の光は、何時の間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹藪の音が、かすかながら其処此処から聞えて来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する気でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上つた。翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗つてゐる——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを感じてゐるやうな容子である。

「兎に角、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まつたくさ。お爺さんも、さう思ふだらう。」
「手前ですか。手前なら、さう云ふ運はまつぴらですな。」
「へえゝ、さうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね。」
「おや観音様を、御信心なさいまし。」
「さう〳〵、明日から私も、お籠でもしようよ。」

[illegible]二月――

手巾

手巾

東京帝國法科大學教授、長谷川謹造先生は、ヴエランダの籐椅子に腰をかけて、ストリントベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐた。

先生の專門は、植民政策の研究である。從つて、讀者には、先生がドラマトゥルギイを讀んでゐると云ふ事が、聊、唐突の感を與へるかも知れない。が、學者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、專門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の學生の思想なり感情なりに、關係のある物は、暇のある限り、必一應は、眼を通す。現に、昨今は、先生の校長を兼ねてゐる或高等專門學校の生徒が、愛讀すると云ふ、唯、それだけの理由から、オスカア・ワイルドのデ・プロフンディスとか、インテン

ションだと云ふ物さへ、一[illegible]。さう云ふ先生の事であるから、今、読んでゐる本が、欧洲近代の戯曲及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故と云へば、先生の薫陶を受けてゐる学生の中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論を書く学生が、あるばかりでなく、進んでは、さう云ふ近代の戯曲家の跡を追つて、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さへゐるからである。

先生は、警抜な一章を読み了る毎に、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴエランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奥さんの事が、心に浮んで来る。先生は、留学中、米国で結婚をした。だから、奥さんは、勿論、亜

米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも変りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工芸品は、少からず奥さんの気に入つてゐる。従つて、岐阜提灯をヴエランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顕著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧、或意味では、堕落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この堕落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいゝのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。武士道なるものは、決

して偏狹なる島國民の道德を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、歐米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出來るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。惹いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう――先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西兩洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。かう云ふ先生にとつて、奧さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな滿足を繰返してゐる中に、先生は、追々、讀んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、緣の遠くなるのに氣がついた。そこ

て、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、それから又丹念に眼を細い活字の上に、曝しはじめた。すると、丁度、今讀みかけた所にこんな事が書いてある。

俳優が最も普通なる感情に對して、或一つの恰好な表現法を發見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問はず、一面にはそれが樂である處から、又一面には、それによつて成功する處から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかし夫が所謂型なのである。………

先生は、由來、藝術――殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と數へる程しか、見た事がない――嘗て或學生の書いた小說の中に、梅幸と云ふ名が、出て來た事がある。流石、博覽强記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで序の時に、その學生を呼んで、訊いて見た

——君、梅幸と云ふのは何だね。

——梅幸——ですか。梅幸と云ひますのは、當時、丸の内の帝國劇場の座附俳優で、現今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。

小倉の袴をはいた學生は、慇懃に、かう答へた。——だから、先生は、ストリンベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に對しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留學中、西洋で見た芝居の或ものを聯想させる範圍で、幾分か興味を持つ事が出來るだけである。云はば、中學の英語の教師が、イディオムを探す爲に、バアナアド・ショウの脚本を讀むと、大した相違はない。が、興味は、曲りなりにも、興味である。

ヴエランダの天井からは、まだ灯をともさない岐阜提灯が下つてゐる。さうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリンベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐる。自分は、これだけの事を書きさへすれば、それが、如何に日の長い初夏の午後であるか、讀者は容易に想像のつく事だらうと思ふ。しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ譯ではない。さう解釋しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。——現在、ストリンベルクさへ、先生は、中途でやめなければならなかつた。何故と云へば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい。……

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて來た、小さな名刺を見た。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人で

は、ないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顏も、記憶に浮んで來ない。そこで、栞代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰もさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かう云ふ場合は多く待遠しい。尤も、日頃から謹嚴な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に對してでなくとも、さうだと云ふ事は、わざわざ斷る必要もないであらう。

やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはいつて、おさへてゐたノツブを離すのと、椅子にかけてゐた四十恰好の婦人の立上つたのとが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸

の單衣を着て、それを黑の絽の羽織が、胸だけ細く剩した所に、帶止めの翡翠を、涼しい菱の形に、うき上らせてゐる。髮が、丸髷に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた。日本人に特有な、丸顏の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顏を、どこかで見た事があるやうに思つた。

私が長谷川です。

先生は、愛想よく、會釋した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向ふで云ひ出すだらうと思つたからである。

私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はつきりした聲で、かう名乘つて、それから、叮嚀に、會釋を返した。

西山憲一郎と云へば、先生も覚えてゐる。やはりイプセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か独法だつたかと思ふが、大學へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞ひに行つてやつた事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元気のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するやうに、驚く程、よく似てゐるのである。

——はあ、西山君の……さうですか。

先生は、獨りで頷きながら、小さなテエブルの向ふにある椅子を指した。

——どうか、あれへ。

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、叮嚀に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、早速テエブルの上の朝鮮團扇をすすめながら、その向ふ側の椅子に、座をしめた。

——結構なおすまひでございます。

婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。

——いや、廣いばかりで、一向かまひません。

かう云ふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて来た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ轉換した。

——西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。

——はい。

婦人は、つつましく両手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、静にかう云つた。やはり、落着いた、滑な調子で云つたのである。

実は、今日も悴の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございました。存生中は、いろいろ先生にも御厄介になりまして……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釈した先生は、この時丁度、紅茶茶碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいいと思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。――かう云ふ思案が、青年の死とは、全く独立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を片づけずに置く訳には行かない。そこで先生は思切つて、が

ぶりと半碗の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな声で、「そりやあ」と云つた。

――……病院に居りました間も、よくあれが御噂なぞ致したものでございますから、御多忙だらうとは存じましたが、お知らせかたがた、御礼を申上げようと思ひまして……

――いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蝋を引いた団扇をとりあげながら、憮然として、かう云つた。

――とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからと云ふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思つてゐました。――すると、何時になり

ますかな、なくなられたのは。

――昨日が、丁度初七日でございます。

――やはり病院の方で……

さやうでございます。

――いや、實際、意外でした。

――何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな對話を交換してゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、この婦人の態度なり、擧措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の

通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。――先生には、これが不思議であつた。

――昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに當る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しかうけやうはない。そこで、何時ものやうに、元氣のいゝ顔をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の小供が二人、扉をあけるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジャケツトを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男

の子である。無頓着な先生は、譯がわからないので、二人の明い色をした髪の毛を撫でながら、しきりに「どうした。」「どうした。」と云つて慰めた。が、小供は、中々泣きやまない。さうして、洟をすすり上げながら、こんな事を云ふ。

――おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。

先生は、一國の元首の死が、小供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係と云ふやうな問題を、考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちは、未に忘れやうとしても、忘れる事が出來ない。――先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見が次いで起つた。――

丁度、主客の話題が、なくなつた青年の追懷から、その日常生活のディテイルに及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。團扇は、小さなテエブルの下に――上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手が、のつてゐる。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに氣がついた。ふるへ

ながらそれが、感情の激動を強いて抑へようとするせいか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに氣がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれてゐるやうに、繡のある緣を動かしてゐるのに氣がついた。――婦人は、顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから、全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顏をあげた時に、先生の顏には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと云ふ敬虔な心もちと、さう云ふ心もちの意識から來る或滿足とが、多少の芝居氣で、誇張されたやうな、甚、複雜な表情である。

――いや、御心痛は、私のやうな子供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低

い、感情の籠つた聲でかう云つた。

――難有うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから……

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顏には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。――

× × × × ×

それから、二時間の後である。先生は、湯にはいつて、晩飯をすませて、食後の櫻實をつまんで、それから又、樂々と、ヴエランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴエランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひもない。先生は、その

かすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めてゐる。例のストリトベルクも、手にはとつて見たもの丶、まだ一頁も讀まないらしい。それも、その筈である。――先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。さうして、それを、日本の女の武士道だと賞讃した。日本と日本とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しない筈はない。先生は、奥さんに熱心な聴き手を見出した事を、満足に思つた。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と　今では、この三つが、或倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで来る。

先生はどの位、長い間、かう云ふ幸福な回想に耽つてゐたか、わからない。それが、その中に、ふと或雑誌から、寄稿を依頼されてゐた事に氣がついた。その雑誌では「現代の青年に與ふる書」と云ふ題で、四方の大家に、一般道徳上の意見を徴してゐたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。――かう思つて、先生は、ちよいと頭を掻いた。

掻いた手は、本を持つてゐた手である。先生は、今まで閑却されてゐた本に、氣がついて、さつき入れて置いた名刺を印に、讀みかけた頁を、開いて見た。丁度、その時、小間使が来て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細い活字も、さほど讀むのに煩はしくない。先生は、別に讀む氣もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクは云ふ。

――私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、

手巾のことを話した。それは、顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味と名づける。

先生は、本を膝の上へ置いた。開いたまま置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、まだ頁のまん中にのつてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穏な調和を破らうとする、得体の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、實践道徳上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、讀んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と――

先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……――五年九月――

尾形了齋覚え書

尾形了齋覺え書

今般、當村内にて、切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ可き旨、御沙汰相成り候段屹度承知仕り候。

陳者、今年三月七日、當村百姓與作後家篠と申す者、私宅へ參り、同人娘里(當年九歳)大病に付き、檢脈致し呉れ候樣、達て頼入り候。右篠と申し候は、百姓惣兵衛の三女に有之、十年以前與作方へ縁付き、里を儲け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再縁も仕らず、機織り乃至は賃仕事など致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、專ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴天連

得致し候へば、篠も流石に、推してとも申し兼ね、其儘歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通りも絶え候所、卯時ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ參り、又々懇願致し呉れ候樣、頼み入り候間、私申し候は、長袖ながら、二言は御座無く候、去れば、娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候と斯樣申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如く相成り、私前に再三額づき又は手を合せて拜みなど致し候うて、仰せ千萬御尤もに候、なれども、切支丹宗門の敎にて、一度ころび候上は、私魂魄とも、生々世々亡び申す可く候、何卒、私心根を不憫と思召され、此儀のみは、御容赦下され度候、など掻き口說き叫び入り候、邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二無き儀相見え多少とも、哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廢す可らざるの道

理に候へば、如何樣申し候うても、ころび候上ならでは、檢脈叶ひ難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し樣無き顏を致し、少時私顏を見つめ居り候が、突然涙をはらはらと落し、私足下に手をつき候うて、何やら蚊の樣なる聲にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確と聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸、然らば是非無く候へば、ころび候可き趣、納得致し候。なれどもころび候實證無之候へば、證文を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、くるすを取り出し、玄關式臺上へ差し置き候うて、靜に三度まで踏み候。其節は、格別取亂したる氣色も無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の樣にて、私方下男など、皆々氣味惡しく思ひし由に御座候。

扨、私申し候も相立ち候へば、早速下男に藥籠を擔はせ、大雨の中を、篠

同道にて、同人宅へ參り候所、至極手狹なる部屋に、里獨り、南を枕にして打臥し居り候。尤も、身熱甚しく候へ共、前後不覺の體に相見え、いたいけなる手にて、繰返し繰返し、空に十字を描き候うては、頻にはるれやと申す語を、譫の如く口走り、其都度さも嬉しげに微笑致し居り候。右、はるれやと申し候は、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讚頌を捧ぐる儀に御座候由、篠、其節枕もとにて、泣く泣く申し聞かし候。依つて、早速容態を窺ひ候へは、傷寒の病に紛れ無く、且は手遲れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかる可きやに見立て候間、詮方無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人、又々狂氣の如く相成り「私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを、落命致させ候うては、其甲斐、萬か一にも無之かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私心苦しさを、御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り

留め下され度候」と申し、私のみならず、私下男足下にも、手をつき候うて頻に頼み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる樣、呉れ呉れも、申し諭し、煎藥三貼差し置き候上、折からの雨止みを幸、立ち歸らんと致し候所、篠、私袂にすがりつき候うて、離れ申さず何やら申さんとする氣色にて、唇を動かし候へども、一言も申し果てざる中に見る見る顏色變り、俄、其場に悶絶致し候。然れば、私大に仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候所、漸、正氣づき候へども、最早立上り候氣力も無之「所詮は、私心淺く候儀、娘一命、泥烏須如來、二つながら失ひしに極まり候」とて、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へども、一向耳に掛くる容子も御座無く、且は娘容體も詮無く相見え候間、止むを得ず再下男召し伴れ、匆々歸宅仕り候。

仲天蓮乃と申す者、今般、伊智温共相從へ、隣村より歸宅へ參り、同人儀傳聞き届け候上、一同宗門傳に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り撒きなど、致し候所、信仰心自ら醉ひ、甲も乙も無く蘇生致し候由、昔を悲しげに申し聞かせ候。古來、一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、一兩日に申り、乃至は撫紀に觸れ候者のみに有之、甲の如く、傷害の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未曾承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して仲天蓮當村へ參り候節、吾當領に震ひ候も、天の彼を惡む所かと推察仕り候。

猶、甲乙兩里當日仲天蓮乃と申すと同道にて、隣村へ引移り候次第、並に惠元寺住職日寛殿許らひにて同人宅燒き棄て候次第は、既に名主與惣左衛

門殿より、書上仕り候へば、私見聞致し候仔細のみ、恐々右にて相書き申す可く候。但、當一記し漏れも有之候儀は、再日再應書面を以て書上仕る可く、先は私覺之儀斯くの如くに御座候。以上

申年三月二十六日

伊豫國宇和郡　―村

樽部尾形丁齋

虱

一

元治元年十一月廿六日、京都守護の任に當つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる爲、國家老の長大隅守を大將にして、大阪の安治川口から、船を出した。

小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅船が、皆、それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は如何にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乘組んでゐる連中は、中中勇ましがつてゐる所の騷ぎで

はない。が、その一艘の船にも、一艘に、主従三十四人、船頭四人、併せて三十八人づつ乗組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも碌に、出来ない位、狹い。それから又、胴の間には、澤庵漬を漬桶へつめたのが、足のふみ所もない位、並らべてある。慣れない内は、その臭氣を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き氣を催した。最後に陰暦の十一月下旬だから、海上を吹いて來る風が、まるで身を切るやうに冷い。殊に日が暮れてからは、摩耶颪なり水の上なり流石に北國生れの若侍も、多くは歯の根が合はないと云ふ始末であつた。

その上、船の中には、虱が澤山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと云ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつてゐる。檣にもたかつてゐる。幟にもたかつてゐる。錨にもたかつてゐる。少し誇張して云へば、人間を乗せる爲の船だか、虱を乗せる爲の船だか、判然しない位である。勿論

その位だから、着物には、何十匹となくたかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いい氣になつて、ちくちくやる。それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、白胡麻をふり撒いたやうに、澤山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出來る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にゐる侍と云ふ侍の體は、悉く虱に食はれた痕で、まるで麻疹にでも罹つたやうに、胸と云はず腹と云はず、一面に赤く腫れ上つてゐた。

しかし、いくら手のつけやうがないと云つても、そのまゝ打遣つて置くわけには、到底行かない。そこで、船中の連中は、暇さへあれば、虱狩をやつた上は家老から下は草履取まで、悉く、裸になつて、隨所にゐる虱を、てんでに茶呑茶碗の中へ、取つては入れ、取つては入れするのである。大きな帆に内

海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶碗を持つて、帆綱の下、舳の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じが先に立つが、「必要」の前に、一切の事が真面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に變りはない。――そこで、一船の裸侍は、それ自身が大きな虱のやうに、寒いのを我慢して、毎日根氣よく、そこここと歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしてゐた。

二

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森權之進と云ふ中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持の御徒士である。この男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから、勿論、何處と云はず、たかつてゐる。髷ぶしへのぼつてゐる奴があるかと思ふと、袴腰のふちを渡つてゐる奴がある。それでも別段、氣にかけない。

では、この男だけ、虱に食はれないのかと云ふと、又さうでもないらしい。やはり外の連中のやうに、體中、金錢斑々とでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、當人がそれを掻いてゐる所を見ると、痒くない譯でもないらしい。が、痒くつても何でも、一向平氣ですましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいいが、外の連中が、せつせと虱狩をしてゐるのを見ると、わきからこんな事を云ふ。

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに、茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」

「貰うて、どうさつしやる？」同役の一人が、呆れた顔をして、から尋ねた。
「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」
森は、恬然として答へるのである。
「では殺さずにとつて進ぜよう。」
同役は、冗談だと思つたから、二三人の仲間と一しよに、半日がかりで、虱を生きたまゝ、紙袋へ一杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ」と云つたら、いくら依怙地な森でも、閉口するだらうと思つたからである。
すると、こつちからはまだ何とも云はない内に、森が自分の方から催促をかけた。
「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。
「ではここへ入れてくれさつしやい。」
森は平然として、着物の襟をくつろげた。
「痩我慢をして、あとでお困り召さるな。」
同役がかう云つたが、當人は耳にもかけない。そこで一人づつ、持つてゐる紙袋を逆にして、米屋が一合枡で米をはかるやうに、ぞろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、
「有難い。これで今夜から暖に眠られるて。」と聞はづれな獨語を云つて、納まつてゐる。
「虱がゐると、暖かになるかな。」
呆氣にとられてゐた同役は、皆互に顔を見合せながら、誰に尋ねるともな

く、かう云つた。すると、森は、虱を入れた後の襟を、叮嚀に直しながら、一座、皆の顔を莫迦にしたやうに見まはして、それからこんな事を云ひ出した。

「各々は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この権之進はひかぬぢや。咳もせぬ。洟もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるのと云うた覚は、嘗てあるまい。各々はこれを、誰のおかげぢやと思はつしやる。――みんな、虱のおかげぢや。」

何でも彼の説によれば、体に虱があると、必ちくちく刺す。刺すから、どうしても掻きたくなる。そこで、体中万遍なく刺されると、やはり体中万遍なく掻きたくなる。所が人間と云ふものはよくしたもので、痒い痒いと思つて掻いてゐるうちに、自然と掻いた所が、熱を持つたやうに温くなつて来る。

そこで、温くなつてくれば、睡くなつて来る。睡くなつて来れば、痒いのもわからない。――かう云ふ調子で、虱さへ体に沢山ゐれば、睡つきもいいし、風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずである。………

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したやうに、かう云つた。

三

それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼ふ連中が出来て来た。この連中も、暇さへあれば、茶呑茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に變りがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一一刻銘に懐に入れて、大事に飼つておく事だけである。

しかし、何処の国、何時の世でも、Précurseur の説が、そのまま何人にも

賞められると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の異論に反對する、Pessimist が大勢ゐた。

中でも、筆頭第一の Pessimist は井上典藏と云ふ御徒士である。これも亦物好きな男で、虱をとると必ず皆食つてしまふ。夕めしをすませると、黒作りの膳を前に置いて、うまさうに何かぷつりぷつり嚙んでゐるから、側へよつて膳の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる。」と聞くと、「左樣さ。油臭い燒米のやうな味でござらう」と云ふ。虱を口でつぶす者は、何處にでもゐるが、この男のはさうではない。全く點心を食ふ氣で、毎日虱を食つてゐる。これが先、第一に森に反對した。

井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐないが、井上の反對説に加擔をする者は可成ある。この連中の云ひ分によると、虱がゐたからと云つて、人間の體は決して溫まるものではない。それのみならず、孝經にも、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身體を、虱如きに食はせるとは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても、虱は狩るべし。飼ふべからずである。……

かう云ふ行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時々口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでゐた内は、差支へないが、とうとう、しまひには、それが募つて、思ひもよらない刃傷沙汰さへ、始まるやうな事になつた。

それと云ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて、人から貰つた虱を、紙袋へ入れてとつて置くと、油斷を見すまして、井上が、何時の間にか、それを食つてしまつた。森が來て見ると、もう一匹もない。そこで、この Pes

酒虫

一

近年にない暑さである。どこを見ても、石を畳んだ家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕の巣さへ、この塩梅では中にゐる雛や卵を、そのまゝ蒸殺してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ畑は、麻でも黍でも、皆、土いきれにぐつたりと頭をさげて、何一つ、青いなりに、萎れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の温気に中てられたせいか、地上に近い大気は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霰を炮烙で煎つたやうな、形ばかりの雲の峯が、つぶつぶと浮かんでゐる。「酒虫」の話は、この陽気に、わざ〳〵炎天の打麦場へ

出てゐる、三人の男で始まるのである。

不思議な事に、その中の一人は、赤裸で、仰向けに地面へ寝ころんでゐる。おまけに、どう云ふ訳だか、綱で、手も足もぐるぐる巻にされてゐる。が、縛られた人は、それを苦に病んでゐる容子もない。背の低い、血色の好い、どことなく鈍重と云ふ感じを起させる、豚のやうに肥つた男である。それから手ごろな素焼の瓶が一つ、この男の枕もとに置いてあるが、これも中に何がはいつてゐるのだか、わからない。

もう一人は、黄色い法衣を着て、耳に小さな青銅の環をさげた、一見、[illegible]である。皮膚の色が並はずれて黒い上に、髪や髭の縮れてゐる所を見ると、どうも亜細亜の南からでも来た人間らしい。これはさつきから根気よく、長柄の麈尾をふりふり、裸の男にたからうとする虻や蠅を追つて

ゐたが、流石に少しくたびれたと見えて、今では、例の素焼の瓶の側へ来て七面鳥のやうな恰好をしながら、勿体らしくしやがんでゐる。

あとの一人は、この二人からずつと離れて、打麦場の隅にある茅房の軒下に立つてゐる。この男は、顋の先に、鼠の尻尾のやうな髯を、申訳だけに生やして、踵が隠れる程長い皂布衫に、結目をだらしなく垂らした茶褐帯と云ふ拵へである。白い鳥の羽で製つた団扇を、時々大事さうに使つてゐる容子では、多分、儒者か何かにちがひない。

この三人が三人とも、云ひ合せたやうに、口を噤んでゐる。その上、碌に身動きさへもしない。何か、これから起らうとする事に、非常な興味でも持つてゐて、その為に、皆、息をひそめてゐるのではないかと思はれる。

日は正に、亭午であらう。犬も午睡をしてゐるせいか、吠える声一つ聞え

たり、打麦場を圍つてゐる麦や黍も、青い葉を日に光らせて、ひつそりかんと靜まつてゐる。それから、その末に見える空も、一面に、熱くるしく、炎靄をたゞよはせて、雲の峯さへもこの暑に、喘息をついてゐるのかと、疑はれる。見渡した所、息が通つてゐるらしいのは、この三人の男の外にない。さうして、その三人が又、關帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに沈默を守つてゐる……

勿論、日本の話ではない。――支那の長山と云ふ所にある劉氏の打麦場で、或年の夏、起つた出來事である。

二

裸で、炎天に寢ころんでゐるのは、この打麦場の主人で、姓は劉、名は大成と云ふ、長山では、屈指の素封家の一人である。この男の道樂は、酒を飲

む一方で、朝から、晩まで、盃を離したと云ふ事がない。それも、「獨酌する毎に輒、一甕を盡す」と云ふのだから、人並をはづれた酒量である。尤も前にも云つたやうに、「負郭の田三百畝、半は黍を種う」と云ふので、飲の爲に家產が累はれるやうな惧は、萬々ない。

それが、何故、裸で、炎天に寢ころんでゐるかと云ふと、それには、かう云ふ因緣がある。――その日、劉が、同じ飲仲間の孫先生と一しよに（これが、白羽扇を持つてゐた儒者である。）風通しのいゝ室で、竹婦人に凭れながら、棋局を鬪はせてゐると、召使ひの丫鬟が來て、「唯今、寳幢寺とかにゐると云ふ、坊さんが御見えになりまして、是非、御主人に御目にかゝりたいと申しますが、いかゞ致しませう」と云ふ。

「なに、寳幢寺？」かう云つて、劉は小さな眼を、まぶしさうに、しばたた

いたが、やがて、暑さうに肥つた体を起しながら、「では、こゝへ御通し申せ」と云ひつけた。それから、孫先生の顔をちよいと見て「大方あの坊主でせう。」とつけ加へた。

宝幢寺にゐる坊主と云ふのは、西域から来た蛮僧である。これが、医療も加へれば、房術も施すと云ふので、この界隈では、評判が高い。たとへば、張三の黒内障が、忽、快方に向つたとか、李四の病閉が、即座に平癒したとか、殆、奇蹟に近い噂が盛に行はれてゐるのである。――この噂は、二人とも聞いてゐた。その蛮僧が、今、何の用で、わざわざ、劉の所へ出むいて来たのであらう。勿論、劉の方から、迎へにやつた覚えなどは、全然ない。

序に云つて置くが、劉は、一體、来客を悦ぶやうな男ではない。が、他に一人、来客がある場合に、新来の客が来たとなると、大抵ならば、快く逢つてやる。客の手前、客のあるのを自慢すると云つたら、よささうな、小供らしい虚栄心を持つてゐるからである。それに、今日の蛮僧は、この頃、どこででも評判になつてゐる。決して、逢つて恥しいやうな客ではない。――劉が逢はうと云ひ出した動機は、大體こんな所にあつたのである。

「何の用でせう」

「まづ、物貰ひですな、信施でもしてくれと云ふのでせう。」

こんな事を、二人で話してゐる内に、やがて、家童の案内で、はいつて来たのを見ると、背の高い、紫石稜のやうな眼をした、異形な沙門である。黄色い法衣を着て、その肩に、縮れた髪の伸びたのを、うるささうに垂らしてゐる。それが、朱柄の麈尾を持つたまゝ、のつそり室のまん中に立つた。挨拶もしなければ、口もきかない。

劉は、しばらく、ためらつてゐたが、その内に、それが何となく、不安になつて來たので「何か御用かな。」と訊いて見た。すると。蠻僧が云つた。「あなたでせうな、酒が好きなのは。」

「さやう。」劉は、あまり問が唐突なので、曖昧な返事をしながら、救を求めるやうに、孫先生の方を見た。孫先生は、すまして、獨りで、棊盤に石を下してゐる。まるで、取り合ふ容子はない。

「あなたは、珍しい病に罹つて御出になる。それを御存知ですかな。」蠻僧は念を押すやうに、かう云つた。劉は、病と聞いたので、けげんな顔をして、竹婦人を撫でながら、

「病――ですかな。」

「さうです。」

「いや、幼少の時から……」劉が何か云はうとすると、蠻僧はそれを遮つて

「酒を飲まれても、醉ひますまいな。」

「……」劉は、ぢろぢろ、相手の顔を見ながら、口を噤んでしまつた。實際この男は、いくら酒を飲んでも、醉つた事がないのである。

「それが、病の證據ですよ。」蠻僧は、うす笑をしながら、語をついで、「腹中に酒蟲がゐる。それを除かないと、この病は癒りません。貧道は、あなたの病を癒しに來たのです」

「癒りますかな。」劉は思はず覺束なさうな聲を出した。さうして、自分でそれを恥ぢた。

「癒ればこそ、來ましたが。」

すると、今まで、默つて、問答を聞いてゐた孫先生が、眼を擡げた。

「何か、藥でも御用ひか。」
「いや、藥なぞは用ひるまでもありません。」蠻僧は不愛想に、かう答へた。
孫先生は、元來、道佛の二教を殆、無理由に輕蔑してゐる。だから、道士とか僧侶とかと一しよになつても、口をきいた事は滅多にない。それが、今ふと口を出す氣になつたのは、全く酒蟲と云ふ語の興味に動かされたからで、酒の好きな先生は、これを聞くと、自分の腹の中にも、酒蟲がゐはしないかと、聊、不安になつて來たのである。所が、蠻僧の不承不承な答を聞くと、急に、自分が莫迦にされたやうな氣がしたので、先生はちよいと顏をしかめながら、又元の通り、默々として棋子を下しはじめた。さうして、それと同時に、内心、こんな横柄な坊主に逢つたり何ぞする主人の劉を、莫迦げてゐると思ひ出した。

劉の方では、勿論そんな事に頓着しない。
「では、針でも使ひますかな。」
「なに、もつと譯のない事です。」
「では呪ですかな。」
「いや、呪でもありません。」
かう云ふ會話を繼續した末に、蠻僧は、簡單に、その療法を說明して聞かせた――それによると、唯、裸になつて、日向にぢつとしてゐさへすればよいと云ふのである。劉には、それが、甚、容易な事のやうに思はれた。その位の事で癒るなら、癒して貰ふのに越した事はない。その上、意識してはゐなかつたが、蠻僧の治療を受けると云ふ點で、好奇心も少しは動いてゐた。
そこでとうとう、劉も、こつちから頭を下げて、「では、どうか一つ、癒し

て頂きませう。」と云ふ事になつた。――劉が、裸で、炎天の打麥場にねころんでゐるのには、かう云ふ謂れが、あるのである。

すると蠻僧は、身動きをしてはいけないと云ふので、劉の體を細引で、ぐるぐる卷にした。それから、僮僕の一人に云ひつけて、酒を入れた素燒の瓶を一つ、劉の枕もとへ持つて來させた。當座の行きがかりで、糟邱の良友たる孫先生が、この不思議な療治に立合ふ事になつたのは云ふまでもない。

酒蟲と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中にゐなくなると、どうなるのだか、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだか、それを知つてゐるのは、蠻僧の外に一人もない。かう云ふと、何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂濶なやうに思はれるが、普通の人間が、學校の教育などをうけるのも、實は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。

三

暑い。額へ汗がぢりぢりと湧いて來て、それが玉になつたかと思ふと、つうつと生暖く、眼の方へ流れて來る。生憎、細引でしばられてゐるから、手を出して拭ふ譯には、勿論行かない。そこで、首を動かして、汗の進路を變へやうとすると、その途端に、はげしく眩暈がしさうな氣がしたので、殘念ながら、この計畫も亦、見合せる事にした。その中に、汗は遠慮なく、眶をぬらして、鼻の側から口許をまはりながら、顋の下まで流れて行く。氣味が惡い事夥しい。

それまでは、眼を開いて、白く焦された空や、葉をたらした麻畑を、まじまじと眺めてゐた劉も、汗が無暗に流れるやうになつてからは、それさへ斷念しなければならなくなつた。劉は、この時、始めて、汗が眼にはいると、し

今では、日に干されて、前のやうには、流れなくなつてしまつた。

しかし、はげしい眩暈が、つゞいて、二三度起つた。頭痛はさつきから、ひつきりなしにしてゐる。劉は、心の中で愈、蠻僧を怨めしく思つた。何故自分ともあらうものが、あの本人間の口車に乗つて、こんな炎天に苦しみをするのだらうと思つた。その内に、喉は、益、渇いて来る。胸は妙にむかついて来る。もう我慢にも、ぢつとしてはゐられない。そこで劉はとう／＼思切つて、枕もとの蠻僧に、療治の中止を申込むつもりで、喘ぎながら、口を開いた。

すると、もう途端である。劉は、何とも知れない塊が、少しづゝ胸から喉へ這上つて来るのを感じ出した。それが或は蚯蚓のやうに、蠕動してゐるかと思ふと、或は守宮のやうに、少しづゝ居ざつてゐるやうでもある。兎に角或柔い物が、柔いなりに、むづりむづりと、食道を上へせり上つて来るのである。さうしてとうとうしまひに、それが、喉佛の下を、無理にすりぬけたと思ふと、今度はいきなり、鰌か何かのやうに、ぬるりと暗い所をぬけ出して、勢よく外へとんで出た。

と、その拍子に、例の素焼の瓶の方で、ぼちやりと、何か酒の中へ落ちるやうな音がした。

すると、蠻僧は、急に落つけてゐた腰を持ち上げて、劉の體にかゝつてゐる、細引を解きはじめた。もう、酒蟲が出たから、安心しろと云ふのである。

「出ましたかな。」劉は、呻くやうにから云つて、ふらふらする頭を起しながら、物珍しさの餘り喉の渇いたのも忘れて、裸のまゝ、瓶の側へはひよつた

それと見ると、孫先生も、白羽扇で日をよけながら、急いで、二人の方へやつて来る。二人の肩の上から甕の中を覗きこむと、肉の色が朱泥に似た、小さな山椒魚のやうなものが、酒の中を泳いでゐる。長さは、三寸ばかりであらう。口もあれば、眼もある。どうやら、泳ぎながら、酒を飲んでゐるらしい。劉はこれを見ると、急に胸が悪くなつた。……

四

酒虫を吐いた劉は、その日から、ぱつたり酒が飲めなくなつたのである。今は、匂を嗅ぐのも、嫌だと云ふ。所が、不思議な事に、劉の健康が、それから、少しづつ、衰へて来た。今年で、酒虫を吐いてから、三年になるが、往年の丸丸と肥つてゐた俤は、何処にもない。色の悪い皮膚が、脂じみたまま、険しい顔の骨を包んで、霜に侵された双鬢が、わづかに、顳顬の上に、残つてゐるばかり、一年の中に、何度、床につくか、わからない位だと云ふ事である。

しかし、それ以来、衰へたのは、劉の健康ばかりではない。劉の家産も亦、とんとん拍子に傾いて、今では、三百畝を以て数へた、負郭の田も、多くは人の手に渡つた。劉自身も、余儀なく、馴れない手に鋤を執つて、佗しいその日その日を送つてゐるのである

酒虫を吐いて以来、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか――酒虫を吐いた事と、劉のその後の零落とを、因果の関係に置いて見る以上、これは、誰にでも起りやすい疑問である。現にこの疑問は、長山に住んでゐる、あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を与へられた。今、ここに挙げる三つの答は、その中

ても、最、代表的なものを選んだのである。

第一の答。酒蟲は、劉の福であつて、劉の病ではない。偶、闇愚の醫者に遇つた爲に、好んで、この天與の福を失ふやうな事になつたのである。

第二の答。酒蟲は、劉の病であつて、劉の福ではない。何故と云へば、一飮一石を盡すなどと云ふ事は、到底、常人の考へられない所だからである。そこで、もし酒蟲を除かなかつたなら、劉は必久しからずして、死んだのに相違ない。して見ると、貧病、迭に至るのも、寧、劉にとつては、幸福と云ふべきである。

第三の答。酒蟲は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。劉は、昔から酒ばかり飮んでゐた。劉の一生から酒を除けば、後には、何も殘らない。して見ると、劉は卽酒蟲、酒蟲は卽劉である。だから、劉が酒蟲を去つたのは

自ら己を殺したのも同前である。つまり、酒が飮めなくなつた日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が既になくなつてゐたとしたら、昔日の劉の健康なり家產なりが、失はれたのも、至極、當然な話であらう。

これらの答の中で、どれが、最よく、當を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小說家のDidacticismに倣つて、かう云ふ道德的な判斷を、この話の最後に、列べて見たまでゝある。

——五年四月

煙

管

煙管

一

加州石川郡金沢城の城主、前田斉広は、参勤中、江戸城の本丸へ登城する毎に、必ず愛用の煙管を持つて行つた。当時有名の煙管商、住吉屋七兵衛の手に成つた、金無垢地に、剣梅鉢の紋ぢらしと云ふ、数寄を凝らした煙管である。

前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めてゐる。勿論、裕福な事も、当時の大小名の中で、肩を比べる者は、殆ど、一人もない。だから、その当主たる斉広が、金無垢の煙管を持つと云ふ事は、寧ろ身分相当な装飾品を持つのに過ぎない

のである。

しかし斉広は、この煙管を持つてゐる事を甚だ得意に感じてゐた。尤も断つて置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味てゞも、愛翫したからではない。彼はさう云ふ煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越なる所以を悦んだのである。つまり、彼は、加州百萬石が金無垢の煙管になつて、どこへでも、持つて行けるのが、得意だつたと云つても、差支へない。

さう云ふ次第だから、斉広は、登城してゐる間中、殆ど一刻もその煙管を離した事がない。人と話しをしてゐる時は勿論、獨りでゐる時でも、彼はそれを懐中から出して、鷹揚に口に啣へながら、長崎煙草か何かの匂の高い煙りを、必ず悠々とくゆらせてゐる。

勿論この得意な心もちは、煙管なり、それによつて代表される百萬石なりを、人に見せびらかす程、増長慢な性質のものではなかつたかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中の注意は、明かに、その煙管に集注されてゐる觀があつた。さうして、その集注されてゐると云ふ事を、意識するのが、斉広にとつては、可成快い満足を與へた。現に彼には、同席の大名に、あの煙管は見事だから、ちよいと拝見させて頂きたいと、云はれた後では、のみなれた煙草の味までが何時もより、一層快く、舌を刺戟するやうな氣さへ、したのである。

二

斉広の持つてゐる、金無垢の煙管に、眼を驚かした連中の中で、最もそれを話題にする事を好んだのは、所謂、お坊主の階級である。彼等はよるとさは

ると、鼻をつき合せて、この「加賀の煙管」を材料に得意の饒舌を闘はせた。
「流石は、大名道具だて。」
「同じ道具でも、あゝ云ふ物は、つぶしが利きやす。」
「質に置いたら、何両貸す事かの」
「貴公ぢやあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」
ざつと、こんな調子である。
すると或日、彼等の五六人が、円い頭をならべて、一服やりながら、例の如く煙管の噂をしてゐると、そこへ、偶然、御数寄屋坊主の河内山宗俊が、やつて来た。――後年「天保六歌仙」の中の、悪名をつとめる事になつた男である。
「ふん又煙管か。」

河内山は、一座の坊主を、尻眼にかけて、冷笑いた。
「形と云ひ、地金と云ひ、見事な物さ。銀の煙管さへ持たぬこちとらには見るも眼の毒……」
調子にのつて弄んでゐた了哲と云ふ坊主が、ふと気がついて見ると、宗俊は、何時の間にか彼の煙草入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいてゐる。
「おい、おい、それは貴公の煙草入れぢやないぜ。」
「いいつて事よ。」
宗俊は、了哲の方を見むきもせずに、又煙草をつめた。さうして、それを吸つてしまふと、生あくびを一つしながら、煙草入れをそこへ抛り出して、
「えゝ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ」

了哲は慌てゝ、煙草入れをしまつた。
「なに、金無垢の煙管なら、それでも、ちよいとのめようと云ふものさ。」
「ふん、又煙管か。」と繰返して、「そんなに、金無垢が有難けりや何故お煙管拝領と出かけねえんだ。」
「お煙管拝領？」
「さうよ」
流石に、了哲も相手の傍若無人なのにあきれたらしい。
「いくらお前、わしが慾ばりでも、……せめて、銀でゝもあれば、格別さ。……兎に角、金無垢だぜ。あの煙管は。」
「知れた事よ。金無垢ならばこそ、貰ふんだ。眞鍮の駄六を拝領に出る奴が何處にあるに

「だが、そいつは少し恐れだて」
了哲はきれいに剃つた頭を一つたゝいて恐縮したやうな身ぶりをした。
「手前が貰はざ、己が貰ふ。いゝか、あとで羨しがるなよ。」
河内山はかう云つて、煙管をはたきながら肩をゆすつて、せゝら笑つた。

三

それから間もなくの事である。
齊廣が何時ものやうに、殿中の一間で煙草をくゆらせてゐると、西王母を描いた金襖が、靜に開いて、黒手の黄八丈に、黒の紋附の羽織を着た坊主が一人、恭しく、彼の前へ這つて出た。顔を上げずにゐるので、誰だかまだわからない。――齊廣は、何か用が出来たのかと思つたので、煙管をはたきながら、寛濶に聲をかけた。

「何用かな。」

「えゝ、宗俊御願がございまする。」

河内山はかう云つて、ちよいと言葉を切つた。それから、次の語を云つてしまふ中に、だんだん頭を上げて、しまひには、ぢつと斉広の顔を見つめ出した。――かう云ふ種類の人間のみが持つて居る、一種の愛嬌をたゝへながら、猫が物を狙ふやうな眼で見つめたのである。

「別儀でもございませんが、その御手許にございまする御煙管を、手前、拝領致したうございまする。」

斉広は思はず手にしてゐた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追ひかけるやうに、語を次いだのとが、殆ど同時である。

「如何でございませう。拝領仰せつけられませうか。」

宗俊の語の中にあるものは無心の情ばかりではない。お坊主と云ふ階級があらゆる大名に対して持つてゐる、威嚇の意も籠つてゐる。煩雑な典故を尚んだ、殿中では、天下の侯伯も、お坊主の指導に従はなければならない。斉広には一方にさう云ふ弱味があつた。それから又一方には加州百万石の名を取りたくないと云ふ心もちがある。しかも、彼にとつて金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。――この二つの動機が一つになつた時、彼の手は自ら、その煙管を、河内山の前へ、さし出した。

「おゝ、とらす。持つてまゐれ。」

「有難うございまする。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、恭しく押頂いて、そこそこ、又西王母の襖の向うへ、ひき下つた。すると、ひき下る拍子に、後から袖を引いた

ものがある。ふりかへると、そこには、了哲が、うすいものある顔をにやつかせながら、彼の掌の上にある金無垢の煙管を、物欲しさうに、指さしてゐた。

「かう、見や」

河内山は、小聲で、かう云つて煙管の雁首を、了哲の鼻の先へ、持つて行つた。

「とう〳〵、せしめたな」

「だから、云はねえ事ぢやねえ。今になつて、羨ましがつたつて、後の祭だ」

「今度は、私も拝領と出かけよう」

「へん、御勝手になせえました。」

河内山は、ちよいと煙管の目方をひいて見て、それから、蔑しに了哲の方を一瞥しながら、又、肩をゆすつてせゝら笑つた

では、煙管をまき上げられた斉廣の方は、不快に感じたかと云ふと、必しもさうではない。それは、彼が、下城をする時に、何時になく機嫌のよさゝうな顔をしてゐるので、供の侍たちが、不思議に思つたと云ふのでも、知れるのである。

彼は、寧、宗俊に煙管をやつた事に、一種の満足を感じてゐた。或は、煙管を持つてゐる時よりも、その満足の度は、大きかつたかも知れない。しかしこれは至極當然な話である。何故と云へば、彼が煙管を得意にするのは、煙管そのものを、愛翫するからではない。實は、煙管の形をしてゐる、百萬石が自慢なのである。だから、彼のこの虚榮心は、金無垢の煙管を愛用する事によつて、滿足させられると同じやうに、その煙管

を惜しげもなく、他人にくれてやる事によつて、更によく満足させられる訳ではあるまいか。但それを河内山にやる際に、幾分外聞の懸念に、悩いられたやうな所があつたにしても、彼の満足が、その為に、少しでも損ぜられる事なぞはないのである。

そこで、斉広は、本郷の屋敷へ帰ると、近習の侍に向つて、愉快さうにかう云つた。

「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ」

五

これを聞いた家中の者は、皆、斉広の宏量なのに驚いた。しかし御用部屋の山崎勘左衛門、御納戸掛の岩田内蔵之助、御勝手方の上木九郎右衛門――この三人の役人だけは思はず、眉をひそめたのである。

加州一藩の経済にとつては、勿論、金無垢の煙管一本の費用位は、何でもない。が、賀節朔望二十八日の登城の度に、必、それを一本ずつ、坊主たちにとられるとなると、容易ならない支出である。或は、その為に運上を増して煙管の入目を償ふやうな事が、起らないとも限らない。さうなつては、大変である――三人の忠義の侍は、皆云ひ合せたやうに、それを未然に惧れた。

そこで、彼等は、早速評議を開いて、善後策を講ずる事になつた。善後策と云つても、勿論、一つしかない。――それは、煙管の地金を全然変更して、坊主共の欲しがらないやうなものにする事である。が、その地金を何にするかと云ふ問題になると、岩田と上木とで、互に意見を異にした。

岩田は君公の體面上銀より卑しい金属を用ひるのは、異なものであると云ふ。上木は又、既に坊主共の欲心を絶たうと云ふのなら、真鍮を用ゐるのに

議した事はない。今更體面を、顧慮する如きは、姑息の見であると云ふ――二人は、各々、自說を固守して、極力論駁を試みた。
すると、老功な山崎が、兩說とも、至極道理がある。が、先、一應、銀を用ひて見て、それでも坊主共が欲しがるやうだつたら、その後に、眞鍮を用ひても、遲くはあるまいと云ふ折衷說を持出した。これには二人とも、勿論、異議のあるべき筈がない。そこで評議は、とうとう、又、住吉屋七兵衞に命じて銀の煙管を造らせる事に、一決した。

六

齊廣は、爾來登城する每に、銀の煙管を持つて行つた。やはり、劍梅鉢の紋ちらしの、精巧を極めた煙管である。
彼が新調の煙管を、以前ほど、得意にしてゐない事は勿論である。第一人と話しをしてゐる時でさへ滅多に手にとらない。手にとつても直に又しまつてしまふ。同じ長崎煙草が、金無垢の煙管でのんだ時ほど、うまくないからである。が、煙管の地金の變つた事は獨り齊廣の上に影響したばかりではない。三人の忠臣が豫想した通り、坊主共の上にも、影響した。しかし、この影響は結果に於て彼等の豫想を、全然裏切つてしまふ事に、なつたのである。何故と云へば坊主共は、金が銀に變つたのを見ると、今まで金無垢なるが故に、遠慮をしてゐた連中さへ、先を爭つて御煙管拝領に出かけて來た。しかも、金無垢の煙管にさへ、愛着のなかつた齊廣が、銀の煙管をくれてやるのに、未練のある可き筈はない。彼は、請はれるままに、惜し氣もなく煙管を投げてやつた。しまひには、登城した時に、煙管をやるのか、煙管をやる爲に登城するのか、彼自身にも判別が出來なくなつた――少くともなつた位で

ある。

これを聞いた、山崎、岩田、上木の三人は、又、額をあつめて評議した。かうなつては、愈上木の獻策通り、眞鍮の煙管を造らせるより外に、仕方がない。そこで、又、例の如く、命が住吉屋七兵衛へ下らうとした――丁度、その時である。一人の近習が齊廣の旨を傳へに、彼等の所へやつて來た。

「御前は銀の煙管を持つと坊主共の所望がうるさい。以來從前通り、金の煙管に致せと仰せられまする。」

三人は、唖然として、爲す所を知らなかつた。

七

河内山宗俊は、外の坊主共が先を爭つて、齊廣の銀の煙管を貰ひにゆくのを、傍痛く眺めてゐた。殊に、了哲が、八朔の登城の節か何かに、一本貰つて、嬉しがつてゐた時なぞは、持前の癇高い聲で、頭から「莫迦め」をあびせかけた位である。彼は決して銀の煙管が欲しくない譯ではない。が、外の坊主共といつしよになつて、同じ煙管の跡を、追ひかけて歩くには、餘りに、「金箔」がつきすぎてゐる。その高慢と欲との鬩ぎあふのに苦しめられた彼は、今に見ろ、己が鼻を明かしてやるから――と云ふ氣で、何氣ない體を裝ひながら、油斷なく、齊廣の煙管へ眼をつけてゐた。

すると、或日、彼は、齊廣が、以前のやうに金無垢の煙管で悠々と煙草をくゆらしてゐるのに、氣がついた。が、坊主仲間では誰も貰ひに行くものがないらしい。そこで彼は折から通りかかつた了哲をよびとめて、そつと顋で齊廣の方を教へながら、囁いた。

「又金無垢になつたぢやねえか。」

了哲はそれを聞くと、呆れたやうな顔をして、宗俊を見た。

「いい加減に欲ばるがいい。銀の煙管でさへ、あの通りねだられるのに、何で又金無垢の煙管なんぞ持つて来るものか。」

「おやあれは何だ。」

「真鍮だらう。」

宗俊は肩をゆすつた。四方を憚つて笑ひ声を立てなかつたのである。

「よし、真鍮なら、真鍮にして置け。己が拝領と出てやるから。」

「どうして、又、金だと云ふのだい。」了哲の自信は、怪しくなつたらしい。

「手前たちの思惑は先様御承知でよ。真鍮と見せて、實は金無垢を持つて来たんだ。第一、百万石の殿様が、真鍮の煙管を献つて持つてゐる筈がねえ。」

宗俊は、口早にかう云つて、獨り、齊廣の方へやつて行つた。あつけにと

られた了哲を、例の西王母の金具の前に残しながら。

それから、半時ばかり後である。了哲は、又畳廊下で、河内山に出つくわした。

「どうしたい、宗俊、一件は。」

「一件た何だ。」

了哲は、下唇をつき出しながら、じろじろ宗俊の顔を見て、

「とぼけなさんな。煙管の事さ。」

「うん、煙管か。煙管なら、手前にくれてやらあ。」

河内山は懐から、黄いろく光る煙管を出したかと思ふと、了哲の顔へ抛りつけて、足早に行つてしまつた。

了哲は、ぶつけられた所をさすりながら、こぼしこぼし、下に落ちた煙管

として登城した。
すると、誰一人、拝領を願ひに出るものがない。前に同じ金無垢の煙管を二本までねだつた河内山さへ、ぢろりと一瞥を与へたなり、小腰をかゞめて行つてしまつた。同席の大名は、勿論拝見したいとも云はずに、黙つてゐる。斉広には、それが不思議であつた。
いや、不思議だつたばかりではない。しまひには、それが何となく不安になつた。そこで彼は又河内山の来かゝつたのを見た時に、今度はこつちから声をかけた。
「宗俊、煙管をとらさうか」
「いえ、難有うございますが、手前はもう、以前に頂いて居りまする。」
宗俊は、斉広が揶揄するとでも思つたのであらう。叮嚀な語の中に、鋭い

を手にとつた。見ると、剣梅鉢の紋ぢらしの数寄を凝らした、——斉広の煙管である。彼は忌々しさうに、それを、又、畳の上へ抛り出すと、白足袋の足を上げて、この上を大仰に踏みつける真似をした、……

八

それ以来、坊主が斉広の煙管をねだる事は、ぱつたり跡を絶つてしまつた。何故と云へば、斉広の持つてゐる煙管は真鍮だと云ふ事が、宗俊と了哲とによつて、一同に証明されたからである。
そこで、一時、真鍮の煙管を金と偽つて、斉広を欺いた三人の忠臣は、評議の末、再、住吉屋七兵衛に命じて、金無垢の煙管を調製させた。前に河内山にとられたのと、寸分もちがはない、剣梅鉢の紋ぢらしの煙管である。——斉広はこの煙管を持つて内心、坊主共にねだられる事を予期しながら、揚々

口気を籠めてから云つた。

　斉広はこれを聞くと、不快さうに、顔をくもらせた。長崎煙草の味も今では、口にあはない。急に今まで感じてゐた、百万石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛なく消えてゆくやうな気がしたからである……………

　古老の伝へる所によると、前田家では斉広以後、斉泰も、慶寧も、煙管は皆真鍮のものを用ひたさうである。事によると、これは、金無垢の煙管に懲りた斉広が、子孫に遺誡でも垂れた結果かも知れない。

（五年十月）——

貉

貉

書紀によると、日本では、推古天皇の三十五年春二月、陸奥で始めて、貉が人に化けた。尤もこれは、一本によると、化レ人でなくて、比レ人とあるが、両方ともその後に歌レ之と書いてあるから、人に化けたにしろ、人に比つたにしろ、人並に唄を歌つた事だけは事實らしい。

それより以前にも、垂仁紀を見ると、八十七年、丹波の國の甕襲と云ふ人の犬が、貉を噛み食したら、腹の中に八尺瓊曲玉があつたと書いてある。この曲玉は馬琴が、八犬傳の中で、八百比丘尼妙椿を出すのに借用した。が、垂仁朝の貉は、唯肚裡に明珠を藏したゞけて、後世の貉の如く變化自在を極めた譯ではない。すると、貉の化けたのは、やはり推古天皇の三十五年春二

月が始めなのであらう。
　貉は、神武東征の昔から、日本の山野に棲んでゐた。さうして、それが、紀元千二百八十八年になつて、始めて人を化かすやうになつた。——かう云ふと、一見甚唐突の観があるやうに思はれるかも知れない。が。それは恐らく、こんな事から始まつたのであらう。
　その頃、陸奥の汐汲みの娘が、同じ村の汐焼きの男と懇をした。が、女には母親が一人ついてゐる。その目を偸んで、夜な夜な逢はうと云ふのだから二人とも一通りな心づかひではない。
　男は毎晩、磯山を越えて、娘の家の近くまで通つて来る。すると娘も、刻限を見計らつて、そつと家を抜け出して来る。が、娘の方は、母親の手前をかねるので、やゝもすると、遅れやすい。或時は、月の落ちかゝる頃になつて、やつと来た。或時は、遠近の一番鶏が啼く頃になつても、まだ来ない。
　そんな事が、何度か続いた或夜の事である。男は、[illegible]のやうな岩のかげに蹲りながら、待つ間のさびしさをまぎらせるつもりで、唄を歌つた。湧き返る浪の音に消されるなと、いらだたしい思ひを、塩からい喉にあつめて、歌つたのである。
　それを聞いた母親は、傍にねてゐる娘に、あの声は何かと云つた。始めは寝たふりをしてゐた娘も、二度三度と問ひかけられると、答へない訳には行かない。人の声ではないさうな。——狼狽した余り娘はかう云つた。
　そこで、人でなくて何が歌ふと、母親が問ひかへした。それに、貉かも知れぬと答へたのは、全く娘の機転である。　貉は昔から、何度となく女にかう云ふ機智を教へた

夜が明けると、両親は、この唄の声を聞いた事を、近くにある蜑小屋の蜑に話した。蜑も亦この唄の声を耳にした一人である。貉が唄を歌ひますかの――かう云ひながらも、蜑は又これを、塩焼きの男に話した。話が伝はり伝はつて、その村へ来てゐた、乞食坊主の耳へはいつた時、坊主は、貉の唄を歌ふ理由を、仔細らしく説明した。――仏説に転生輪廻と云ふ事がある。だから貉の魂も、もとは人間の魂だつたかも知れない。もしさうだとすれば、人間のする事は、貉もする。月夜に歌を唄ふ位な事は、別に不思議でない。………

それ以来、この村では、貉の歌を聞いたと云ふ者が、何人も出るやうになつた。さうして、しまひにはその貉を見たと云ふ者さへ、現れて来た。これは、鴫の卵をさがしに行つた男が、或夜磯伝ひに帰つて来ると、未だ残つて

ゐる雪の明りで、磯山の陰に貉が一匹唄を歌ひながら、のそのそ歩いてゐるのを目のあたりに見たと云ふのである。

既に、姿さへ見えた。それに次いで、殆一村の老若男女が、悉その声を聞いたのは、寧自然の道理である。貉の唄は、時としては、山から聞えた。時としては、海から聞えた。さうして又更に時としては、その山と海との間に散在する、苫屋の屋根の上からさへ聞えた。そればかりではない。最後には汐汲みの娘自身さへ、或夜突然この唄の声に驚かされた。

娘は、勿論これを、男の唄の声だと思つた。寝息を窺ふと、母親はよく寝入つてゐるらしい。そこで、そつと床をぬけ出して、入口の戸を細目にあけながら、外の容子を覗いて見た。が、外はうすい月と浪の音ばかりで、男の姿はどこにもない。娘は思はず、つめたい春の夜風に、頬をおさへながら、

立ちすくんだ。戸の前の砂の上に、点々として貉の足跡のついてゐるのが、その時朧げに見えたからである。……

この話は、忽ち幾百里の山河を隔てた、京畿の地まで喧伝された。それから山城の貉が化ける。近江の貉が化ける。遂には同属の狸までも化け始めて、徳川時代になると、佐渡の団三郎と云ふ、貉とも狸ともつかない先生が出て、海の向ふにゐる越前の国の人をさへ、化かすやうな事になつた。

化かすやうになつたのではない。化かすと信ぜられるやうになつたのである——かう諸君は、云ふかも知れない。しかし、化かすと云ふ事と、化かすと信ぜられると云ふ事との間に、果してどれ程の相違があるのであらう。

独り貉ばかりではない。我々にとつて、すべてあると云ふ事は、畢竟するに唯あると信ずる事にすぎないではないか。

イエーツは、「ケルトの薄明り」の中で、ジル湖上の子供たちが、青と白との衣を着たプロテスタント派の少女を昔ながらの聖母マリアだと信じて、疑はなかつた話を書いてゐる。ひとしく人の心の中に生きてゐると云ふ事から云へば、湖上の聖母は、山沢の貉と何の異る所もない。

我々は、我々の祖先が、貉の人を化かす事を信じた如く、我々の内部に生きるものを信じようではないか。さうして、その信ずるものの命ずるまゝに我々の生き方を生きやうではないか。

貉を軽蔑すべからざる所以である。

——六年三月——

忠義

忠義

一　前島林右衛門

板倉修理は、病後の疲労が稍恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲はれた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好きな書見にさへ、身がはいらない。廊下を通る人の足音とか、家中の者の話声とかが聞えただけで、すぐに注意が擾されてしまふ。それがだんだん昂じて来ると、今度は極些細な刺戟からも、絶えず神経を虐まれるやうな事になつた。

第一、莨盆の蒔絵などが、黒地に金の唐艸を這はせてゐると、その細い蔓や葉が、どうも気になつて仕方がない。その外象牙の箸とか、青銅の火箸とか

が云ふ釘の尖つた物を見ても、やはり不安になつて來る。しまひには、疊の縁の交叉した角や、天井の四隅までが、丁字形の刃物を見つめてゐる時のやうな、切ない神經の緊張を、感じさせるやうになつた。

修理は、止むを得ず、毎日陰氣な顏をして、ぢつと居間にすくまつてゐた。何をどうするのも苦しい。出來る事なら、この儘存在の意識もなくなしてしまひたいと思ふ事が、度々ある。が、それは、ささくれた神經の方で、許さない。彼は、蟻地獄に落ちた蟻のやうな、いら立たしい心で、彼の周圍を見まはした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、徒に萬一を惧れてゐる「譜代の臣」ばかりである。「己は苦しんでゐる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」――さう思ふ事が、旣に彼には一倍の苦痛であつた。

修理の神經衰弱は、この周圍の無理解の爲に、一層昂進の度を早めたらしい。彼は、事毎に興奮した。隣屋敷まで聞えさうな聲で、わめき立てた事も一再ではない。刀架に手のかかつた事も、度々ある。さう云ふ時の彼は、殆誰の眼にも、別人のやうになつてしまふ。ふだんの黄いろく、肉の落ちた顏が、どこと云ふ事なく痙攣して、眼の色まで妙に殺氣立つて來る。さうして、發作が甚しくなると、必ず左右の鬢の毛を、ふるへる兩手で、かきむしり始める。――近習の者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引にした。さう云ふ時には、互に戒め合つて、誰も彼の側へ近づくものがない。

發狂――かう云ふ怖れは、修理自身にもあつた。周圍が、それを感じてゐたのは、云ふまでもない。修理は勿論、この周圍の持つてゐる怖れには反感を抱いてゐる。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしやうがな

い。彼は、發作が止んで、前よりも一層陰鬱な心が重く頭を壓して來ると、時としてこの怖れが、稻妻のやうに、己を脅かすのを意識した。さうして、同時に又、さう云ふ怖れを抱くことが、既に發狂の前兆のやうな、不吉な不安にさへ、襲はれた。「發狂したらどうする。」――さう思ふと、彼は、俄に眼の前が、暗くなるやうな心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から來るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさが又、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。――云はば、修理の心は、自分の尾を追ひかける猫のやうに、休みなく、不安から不安へ、廻轉してゐたのである。

――――――――

修理のこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となつた。中でも、これ

が爲に、最も心を惱したのは、家老の前島林右衞門である。

林右衞門は、家老と云つても、實は本家の板倉式部から、附人として來てゐるので、修理も彼には、日頃から一目置いてゐた。これは猪首と云ふものの鬚の濃い、赭ら顏の大男で、文武の兩道に秀でてゐる點では、家中の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。――さう云ふ關係上、彼はこれまで、始終修理に對して、意見番の役を勤めてゐた。彼が「板倉家の大久保彥左」などと呼ばれてゐたのも、全くこの忠諫を進める所から來た渾名である。

林右衞門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以來、夜の目も寢ない位、主家の爲に、心を痛めた。既に病氣が本復した以上、修理は近日中に病後の御禮として、登城しなければならない筈である。所が、この逆上では、登城の際、附合の諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無禮を働く

か知れたものではない。萬一それから刃傷沙汰にでもなつた日には、板倉家七千石は、その儘「お取りつぶし」になつてしまふ。殷鑑は遠からず、堀田稲葉の喧嘩にあるではないか。

林右衛門は、かう思ふと、居ても立つてもゐられないやうな心もちがした。しかも彼に云はせると、逆上は「一時の病」ではない。全く「心の病」である——彼は、そこで、放肆を諫めたり、奢侈を諫めたりするのと同じやうに、職務として、修理の神經衰弱を諫めようとした。

だから、林右衛門は、機會さへあれば修理に諫言を進めた。が、修理の逆上は、少しも鎮まるけはひがない。寧、諫めれば、諫める程、焦れれば焦れる程、眼に見えて、嵩じて來る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさへ、しようとした。「主を主とも思はぬ奴じや。本家の手前さへなくば、切つてすてようものを。」——さう云ふ修理の眼の中にあつたものは、既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、又消し難い憎しみの色をも、讀んだのである。

その中に、主從の間に纏綿する感情は、林右衛門の重ねる苦諫に從つて、何時となく疎んで來た。と云ふのは、獨り修理が林右衛門を憎むやうになつたと云ふばかりではない。林右衛門の心にも亦、知らず知らず、修理に對する憎しみが、芽をふいて來た事を云ふのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはゐなかつた。少くとも、最後の一瞬間を除いて、修理に對する彼の忠心は、終始變らないものと信じてゐた。「君君爲らざれば、臣臣爲らず」——これは、孟子の「道」だつたばかりではない。その蔭には、人間の自然の要求がある。しかし、林右衛門は、それを考へようとしなかつた。……

ある。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な體を憎んだ。それから、本家の附人として、彼が陰に持つてゐる權柄を憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。「主を主とも思はぬ奴ぢや。」――かう云ふ修理の語の中には、これらの憎しみが、燻りながら燃える火のやうに、暗い熱を藏してゐたのである。

そこへ、突然、思ひがけない事件が、内室の口によつて傳へられた。林右衛門は、修理を押込め隱居にして、板倉佐渡守の子息を養子に迎へようとする――それが、偶然、内室の耳へ洩れた。これを聞いた修理が、眼を裂いて憤つたのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事と思ふのかも知れない。が、忠義と云ふものは、現在仕へてゐる主人を蔑にしてまでも、「家」の爲を計るべきものであらうか。しかも、林右衛門の「家」を憂へるのは、杞憂と云へば杞憂である。彼はその杞憂の爲に、自分を押込め隱居にしようとした。或はその物々しい忠義呼はりの後に、あはよくば、家を横領しようとする野心でもあるのかも知れない。――さう思ふと、修理は、どんな酷刑でも、この不臣の行を罰するには、輕すぎるやうに思はれた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人を勤めてゐた、田中宇左衛門と云ふ老人を呼んで、かう言つた。

「林右衛門めを縛り首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔には、當惑と不安

が浮んでゐる。――林右衛門の企ては、彼も快くは思つてゐない。が、何と云つても相手は本家からの附人である。

「縛り首は穏便でございますまい。武士らしく切腹でも申しつけまするならば、格別でございますが。」

修理はこれを聞くと、嘲笑ふやうな眼で、宇左衛門を見た。さうして、二三度強く頭を振つた。

「いや人でなし奴に、切腹を申しつける廉はない。縛り首にせい。縛り首にせい。」

が、さう云ひながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬へ、はらはらと涙を落した。さうして、それから――何時ものやうに両手で、鬢の毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云ふ命が出た事は、直に腹心の近習から、林右衛門に傳へられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地づくぢや。手を拱いて縛り首をうたれまい。」

彼は、昂然として、かう云つた。さうして、今まで彼につきまとつてゐた得體の知れない不安が、この沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまふのを意識した。今の彼の心にあるものは、修理に對するあからさまな憎しみである。もう修理は、彼にとつて、主人てはない。その修理を憎むのに、何の憚る所があらう。――彼の心の明くなつたのは、無意識ながら、早くもかう云ふ論理を刹那の間に認めたからである。

そこで、彼は、妻子家來を引き具して、白晝、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼つてある。槍は、林右衞門自ら、小脇にして、先に立つた。武具を擔つたり、具足櫃を擔いだりしてゐる若黨草履取を加へても、一行の人數は、漸く十人にすぎない。それが、いづれも、悄然とした氣色もなく、つれ立つて、門を出た。

延享四年三月の末である。門の外では、生暖い風が、櫻の花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけてゐる。林右衞門は、その風の中に立つて、もう一度、往來の右左を、見廻した。さうして、それから槍で、一同に左へ行けと相圖をした。

二　田中宇左衞門

林右衞門の立ち退いた後は、田中宇左衞門が代つて、家老を勤めた。彼は乳人をしてゐた關係上、修理を見る眼が、自ら外の家來とはちがつてゐる。

彼は親のやうな心もちで、修理の逆上をいたわつた。修理も亦、彼にだけは、比較的從順に振舞つたらしい。そこで、主從の關係は、林右衞門のゐた時から見ると、遙に滑になつて來た。

宇左衞門は、修理の發作が、夏が來ると共に、漸く怠り出したのを喜んだ。彼も、萬一修理が殿中で無禮を働きはしないかと云ふ事を、惧れない譯ではない。が、林右衞門は、それを「家」に關る大事として、惧れた。併し、彼は、それを主に關る大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云ふ事も、彼の念頭には上つてゐた。が、禍があるにしても、それは單に、「家」を亡す故に、大事なのではない。主をして、「家」を亡さしむる故に、主をして、不孝の名を負はしむる故に、大事なのである。では、その大事を未然に防ぐには、どうしたら、いいであらうか。この

時になると、宇左衛門は、林右衛門程明瞭な、意見を持つてゐないやうであつた。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるやうに祈るより外は、なかつたのであらう。

その年の八月一日、徳川幕府では、所謂八朔の儀式を行ふ日に、修理は病後始めての出仕をした。さうして、その序に、當時西丸にゐた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、歸宅した。が、別に殿中では、何も粗相をしなかつたらしい。宇左衛門は、始めて、眉を開く事が出來るやうな心もちがした。

しかし、彼の悦びは、その日一日だけも、續かなかつた。夜になると間もなく、板倉佐渡守から急な使があつて、早速來るやうにと云ふ沙汰が、凶兆のやうに彼を脅したからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。――さう云ふ事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、

初めて修理が登城をした日である。宇左衛門は、不吉な豫感に襲はれながら、慌しく佐渡守の屋敷へ參候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無禮の振舞があつたと云ふ話である。――今日出仕を終つてから、修理は、白帷子に長上下の儀で、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顔色もすぐれないやうだから、或はまだ快癒がはかばかしくないのかとも思つたが、話して見ると、格別、病人らしい容子もない。そこで安心して、暫く世間話をしてゐる中に、偶然、佐渡守が、何時ものやうに前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に顔を嶮くして、「林右衛門めは、先頃、手前屋敷を駈落ち致してござる」と云ふ。林右衛門が、どう云ふ人間かと云ふ事は、佐渡守もよく知つてゐる。何か仔細がなくては、妄に主家を駈落ちなどする男ではない。かう思つたから、佐渡守は、その仔細を

「その儀は、宇左衛門、一命にかけて、承知致しました。」
彼は、眼に涙をためながら懇願するやうに、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀憐を請ふ情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでゐる。――必ず修理の他出を、禁ずる事が出来ると云ふ決心ではない。禁ずる事が出来なかつたから、どうすると云ふ、決心である。
佐渡守は、これを見ると、又顔をしかめながら、厭さうに、横を向いた。
主の意に従へば、家が危い。家を立てようとすれば、主の意に悖る事になる。嘗ては、林右衛門も、この窮境に陥つてゐた。が、彼には、家の為に主を捨てる勇気がある。と云ふよりは、寧、始からそれ程主を大事に思つてゐな

い。だから、彼は、容易に、家の為に主を犠牲にした。
――しかし、自分には、それが出来ない。自分は、家の存亡だけを計るには、余りに、主に親しみすぎてゐる。家の為に、唯、家と云ふ名の為に、どうして、現在の主を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と変りがない。自分が絵解きをした絵本、自分が手をとつて習はせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶――さう云ふ物も、まだ歴々と、自分の記憶には残つてゐる。……
さうかと云つて、主をその儘にして置けば、独り家が亡びるだけではない。主自身にも凶事が起りさうである。利害の打算から云へば、林右衛門のとつた策は、唯一の、さうして又、最も賢明なものに相違ない。自分も、それは

が、どうしても、修理はそれを容易に、會得する氣になれなかつたのであらう。——

「御尤もでございます。佐渡守樣もあのやうに、仰せられますからは、殘念ながら、さうなさるより外はございますまい。が、先一應は、御一門衆へも……」

「いや、いや、隱居の儀なら、林右衛門の欺瞞とは違つて、相談せずとも、一門衆は同意の筈ぢや。」

修理は、かう云つて、晴々しげに、調子の外れた笑聲を立てた。

「さやうでもございますまい。」

宇左衛門は、悲しさうな顏をして、修理を見た。が、相手は、更に耳へ入れる容子もない。

「さて、隱居すれば、出仕しようと思うても出仕する事は出來ぬ。されば」

修理は、ぢつと宇左衛門の顏を見ながら、一句一句、重みを量るやうに、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所樣(吉宗)へ、御目通りがしたい。どうぢや。十五日に、登城させてはくれまいか。」

宇左衛門は、默つて、眉をひそめた。

「それも、たつた一度ぢや。」

「恐れながら、その儀ばかりは」

「いかぬか。」

二人は、顏を見合せながら、默つた。ひつそりとした部屋の中には、油を吸ふ燈心の音よりほかに、聞えるものはない。宇左衛門は、この瞬くの間を、一年のやうに長く感じた。佐渡守へ云ひ切つた手前、これを修理に許しては自分の武士が立たない。

た。

「よろしうございます。佐渡守様が何と仰有りませうとも、万一の場合には、宇左衛門皺腹を仕れば、すむ事でございます。私一人の量見にして、御登城御止め申しませう。」

これを聞くと、修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のやうな巧みさがある。が、又、役者にないやうな自然さもある。

彼は、突然調子の外れた笑ひを笑つた。

「おゝ、許してくれるか。忝い。忝いぞよ。」

さう云つて、彼は嬉しさうに、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衛門は、登城を許してくれたぞ。」

人払ひをした居間には、彼と宇左衛門の外に誰もゐない。皆のもの――宇

左衛門は、気づかはしさうに眉をひそめて、行燈の火影に恐る恐る、修理の眼の中を窺つた。

三 刃傷

延享四年八月十五日の朝、五つ半過ぎに、修理は、殿中で、何の恩怨もない、肥後国熊本の城主、細川越中守宗教を殺害した。その顛末は、かうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君と云はれた宗教の内室さへ、武芸の道には明かつた。まして宗教の嗜みに、疎な所などのあるべき筈はない。それが、「三斎の末なればこそ細川は、二歳に斬られ、五歳となる」と諷はれるやうな死を遂げたのは、完く時の運である。

卵は二つとも潰れて、中の黄身が外へこぼれてしまつた。その時に、座右に一同、思はず顔色を変へたと云ふ事である。

当日、越中守は登城すると、御坊主田代祐悦が供をして、先、大広間へ通つた。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黒木閑斎をつれて、湯呑み所際の厠へはいつて、用を足した。さて、厠を出て、うすぐらい手水所で手を洗つてゐると、突然後から、誰とも知れず、声をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子に又二の太刀が、すかさず眉間へ閃いた。その為に血が眼へはいつて、越中守には、相手の顔も見定める事が出来ない。相手は、そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾太刀となく浴せかけた。さうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四の間の縁

に仆れてしまふと、脇差をそこへ捨てたなり、慌てて何処か見えなくなつてしまつた。

所が、供をしてゐた黒木閑斎が、不意の大変に狼狽して、大広間の方へ逃げて行つたなり、これも何処かへ隠れてしまつたので、誰もこの刃傷を知るものがない。それを、暫くしてから、漸く本間定五郎と云ふ小拾人が、御番所から下部屋へ来る途中で発見した。そこで、すぐに御徒目付へ知らせる。御徒目付からは、御徒組頭久下善兵衛、御徒目付土田半右衛門、菅田仁右衛門などが駈けつける。――殿中では忽、蜂の巣を破つたやうな騒動が出来した。

それから、一同集つて、手負ひを抱きあげて見ると、顔も体も血まみれで、誰とも更に見分ける事が出来ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微な声で、「細川越中」と答へた。続いて、「相手は誰だ」と尋ねたが、「上

懐から鋏を出して、そのかき亂した髮の毛を截んでゐるらしい。そこで宗賀は、側へよつて聲をかけた。

「どなたでござる。」

「これは、人を殺したで、髮を切つてゐるものでござる。」

しはがれた聲で、かう答へた。

もう疑ふ所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男を圍の中から、ひきずり出した。さうして、とりあへず、それを御徒目付の手に渡した。

御徒目付は又、それを蘇鐵の間へつれて行つて、大目付始め御目付衆立ち合ひの上で、刄傷の仔細を問ひ質した。が、男は、物々しい殿中の騷ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答へらしい答へをしない。偶々口を開けば、唯時鳥の事を云ふ。さうして、そのあひ間には、血に染まつた手で、何度となく、髮の毛をかきむしつた。――修理は既に、發狂してゐたのである。

細川越中守は、創の痛で、息をひきとつた。が、大御所吉宗の内意を受けて、手負ひと披露した儘駕籠で中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公に逝去の屆が出たのは、二十一日の事である。

修理は、越中守が引きとつた後で、すぐに水野監物に預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網をかけた駕籠で出たのである。警固のまはりは水野家の足輕が五十人、一樣に新しい柿の帷子を着、新しい白の股引をはいて、新しい棒をつきながら、警固した。　この行列は、監物の日頃不意に備へる手配が、行きとどいてゐた證據として、當時のほめ物になつたさうである。

それから七日目の二十八日に、大目付石河土佐守が、上使に立つた。上使

の趣に、「其方儀亂心したとは申しながら、細川越中守手疵養生不相叶致死去候に付、水野監物宅にて切腹申付者也」と云ふのである。

修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、悄然と手を膝の上に垂れた儘、とらうとする氣色もない。そこで、介錯に立つた水野の家來吉田彌三左衛門が、止むを得ず後からその首をうち落した。うち落したと云つても、頸の皮一枚はのこつてゐる。彌三左衛門は、その首を手にとつて、下から檢使の役人に見せた。顴骨の高い皮膚の黄ばんだ、いたいたしい首である。眼は、勿論つぶつてゐない。

檢使は、これを見ると、血のにほひを嗅ぎながら、滿足さうに、「見事」と聲をかけた。

――――――

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に處せられた。これは「修理病氣に付、禁足申付候樣にと再應、板倉佐渡守兼ねて申含置候處、自身の計らひにて登城させ候故、かかる凶事出來、七千石斷絶に及び候段、言語道斷の不屆者」といふ罪狀である。

板倉周防守、同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉、松平右近將監等の一族緣者が、遠慮を仰せつかつたのは云ふまでもない。その外、越中守を見殺しにして遁げた黒木閑齋は、扶持を召上げられた上、追放になつた。

修理の刃傷は、恐らく過失であらう。細川家の九曜の星と、板倉家の九曜の巴と、衣類の紋所が似てゐる爲に、修理は、佐渡守を斬らうとして、誤つて越中守を害したのである。以前、毛利主水正を、水野隼人正が斬つたのも、

やはりこの人違ひであつた。殊に、手水所のやうな、うす暗い所では、から云ふ間違ひも、起りやすい。――これが當時の定評であつた。が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。彼は、かう云ふ噂が出ると、何時も苦々しげに、から云つた。

「佐渡は、修理に刃傷されるやうな覺えは、毛頭ない。まして、あの亂心者のした事ぢや。大方、何と云ふ事もなく、肥後侯を斬つたのであらう。人違ひなどとは、迷惑至極な臆測ぢや。その證據には、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥がどうやら、云うてゐたさうではないか。されば、時鳥ぢやと思つて、斬つたのかも知れぬ。」

六年二月――

芋粥

芋粥

元慶の末か、仁和の始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。讀者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへゐてくれれば、よいのである。――その頃、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちやんと姓名を明にしたいのであるが、生憎舊記には、それが傳はつてゐない。恐らくは、實際、傳はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一體舊記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、餘り興味を持たなかつたらしい。この點で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小說家は、存外、閑人でない。

兎に角、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつて、これが、この話の主人公である。

五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頰が、こけてゐるから、頤が、人並はづれて、細く見える。唇は——一々、數へ立ててゐれば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出來上つてゐたのである。

この男が、何時、どうして、基經に仕へるやうになつたのか、それは誰も知つてゐない。が餘程以前から、同じやうな、色の褪めた水干に、同じやうな、萎々した烏帽子をかけて、同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である。その結果であらう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思はれない。(五位は四十を越してゐた。)その代り

生れた時から、あの寒さうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路の衢風に、吹かせてゐたと云ふ氣がする。上は主人の基經から、下は、牛飼の童兒まで、無意識ながら、悉さう信じて疑ふ者がない。

かう云ふ風采を具へた男が、周圍から、受ける待遇は、恐らく書くまでもない事であらう。侍所にゐる連中は、五位に對して、殆ど蠅程の注意も拂はない。有位無位、併せて、二十人に近い下役さへ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めてゐる。五位が何か云ひつけても、決して彼等同志の雜談をやめた事はない。彼等にとつては、空氣の存在が見えないやうに、五位の存在も、眼を遮らないのであらう。下役でさへ、さうだとすれば、別當とか、侍所の司とか云ふ、上役たちが、頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然の數である。彼等は、五位に對すると、殆ど、小供らしい、無意味な惡意

を、冷然とした表情の後に隱して、何を云ふのでも、手眞似だけで、用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。從つて、彼等も手眞似では用を辨じない事が、時々ある。が、彼等は、それを、全然、五位の悟性に缺陷があるからだと、思つてゐるらしい。そこで、彼等は、用が足りないと、この男の歪んだ揉烏帽子の先から、切れかかつた藁草履の尻まで、萬遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂ひながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意氣地のない、臆病な人間だつたのである。

所が、同僚の侍たちになると、進んで、彼を飜弄しようとした。年かさの同僚が、彼の振はない風采を材料にして、古い洒落を聞かせようとする如く、年下の同僚も、亦それを機會にして、所謂興言利口の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲して飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れた、うけ唇の女房と、その女房と關係があつたと云ふ、酒のみの法師とも、屢彼等の話題になつた。その上、どうかすると、彼等は甚、性質の惡い惡戲さへする。それを、今一々、列記する事は、出來ないが、彼の篠枝の酒を飮んで、後へ尿を入れて置いたと云ふ事を、書けば、その外は凡、想像される事だらうと思ふ。

しかし、五位は、これらの揶揄に對して、全然、無感覺であつた。少くも、わき眼には、無感覺であるらしく、思はれた。彼は何を云はれても、顏の色さへ變へた事がない。默つて例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をして、すましてゐる。唯、同僚の惡戲が、高じすぎて、髷に紙切れをくつけたり、

太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は、笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも、一時或いぢらしさに打たれてしまふ。（彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰か――多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。）――さう云ふ気が、朧げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで来るからである。唯その時の心もちを、何時までも持続ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは、丹波の国から来た男で、まだ柔い口髭が、やつと鼻の下に、生へかゝつた位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を軽蔑した。所が、或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云ふ声を聞いてから、どうしても、そ

れが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が、全く、別人として、映るやうになつた。栄養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害にべそを掻いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてが、急に、本来の下等さを露すやうに思はれた。さうして、それと同時に、霜げた赤鼻と、数へる程の口髭とが、何となく、一味の慰安を、自分の心に、伝へてくれるやうに思はれた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。かう云ふ例外を除けば、五位は、依然として、周囲の軽蔑の中に、犬のやうな生活を、続けて行かなければならなかつた。第一、彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍の水干と、同じ色の指貫とが、一つづつあるが、今では、それが上白んで、

靑とも、紺とも、つかないやうな色に、なつてゐる水干に、それでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴の色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、尻のあたりのいたみ方が、一通りではない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が、出てゐるのを見ると、口の惡い同僚でなくとも、瘦公卿の車を牽いてゐる、瘦牛の歩みを見るやうな、みすぼらしい心もちがする。それに、佩いてゐる太刀も、頗る覺束ない物で、柄の金具も、如何はしければ、黑鞘の塗も、剝げかゝつてゐる。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、唯でさへ、猫背なのを、一層、寒空の下に、脊くまつて、もの欲しさうに、左右を眺め眺め、きざみ足に、歩くのだから、通りがかりの物賣りまで、莫迦にするのも、無理はない。現に、かう云ふ事さへ、あつた。……

或日、五位が三條坊門を神泉苑の方へゆく所で、子供が六七人、路ばたに集つて何にかしてゐるのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻してゐるのかと思つて、後ろから覗いて見ると、何處かから迷つて來た、尨犬の首へ繩をつけて、打つたり毆いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は、これまで、何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ氣を兼ねて、まだ一度もそれを行爲に現はした事がない。が、この時だけは相手が子供だと云ふので、幾分か、勇氣が出た。そこで出來るだけ、笑顏をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれゝば、痛いでのう」と聲をかけた。すると、その子供は、ふりかへりながら、上眼を使つて、蔑すむやうに、じろ／＼、五位の姿を見た。云はゞ侍所の別當が用の通じない時に、この男を見るやうな顏をして、見たのである。「いらぬ世話はや

かれたらもない。」その子供は、一足下りながら、高慢な唇を反らせて、かう云つた「何じや、この鼻赤めが。」五位は、この語が、自分の顔を打つたやうに、感じた。が、それは、惡態をつかれて、腹が立つたからでは、毛頭ない。云はなくともいい事を云つて、恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが惡いのを苦しい笑顔に隱しながら、默つて、又、朱雀大路の方へ歩き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしてゐる。勿論彼はそんな事を知らない。知つてゐたにしても、それが、この意氣地のない五位にとつて、何であらう……

では、この話の主人公は、唯、輕蔑される爲にのみ、生れて來た人間で、別に何の希望も持つてゐないかと云ふと、さうでもない。五位は五六年前から芋粥と云ふ物に、異常な執着を持つてゐる。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を云ふのである。當時はこれが、無上の佳味として、上は萬乘の君の食膳にさへ、上せられた。從つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の時にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは、僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいと云ふ事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつてゐた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さへ、それが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は彼がその爲に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた――人間は、時として、充されるか、充されないか、わからない欲望の爲に、一生を捧げてしまふ。その愚を哂ふ者は、畢竟、人生に對する路傍の人に、過ぎない。

しかし、五位が夢想してゐた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に、事實と

なつて、現れた。その経緯を書かうと云ふのが、芋粥の話の目的なのである。

或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である（臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に変りがない）五位も、外の侍たちに交じつて、その残肴の相伴をした。当時はまだ取食みの習慣がなくて、残肴は、その家の侍が一堂に集まつて、食ふ事になつてゐたからである。尤も、大饗に等しいと云つても昔の事だから、品数の多い割に碌な物はない。餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮒、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしてゐる。が、何時も人数が多いので、自分が

飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。さうして気のせいか、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴を、掌で拭いて、誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、かう云つた。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないさうな」

五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑つた。錆のある、鷹揚な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃、同じ基経の恪勤になつてゐた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の広い、身長の群を抜いた逞しい大男で、これは、煠栗を噛みながら、黒酒の杯を重ねてゐた。もう大分酔がまはつてゐるらしい。

「お気の毒な事ぢやの。」利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫

とを一つにしたやうな聲で、語を繼いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう。」

始終、いぢめられてゐる犬は、たまに肉を貰つても、容易によりつかない。五位は、例の、笑ふのか泣くのか、わからないやうな笑顔をして、利仁の顔と、空の椀とを、等分に見比べてゐた。

「おいやかな。」

「……」

「どうぢや。」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まつてゐるのを感じ出した。答へ方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならない。或は、どう答へても、結局、莫迦にされさうな氣さへする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭さうな聲で、「おいやなら、たつてとは申すまい」と云はなかつたなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べてゐた事であらう。

彼は、それを聞くと、慌しく答へた。

「いや……忝うござる。」

この問答を聞いてゐた者は、皆、一時に、失笑した。「いや、忝うござる。」――かう云つて、五位の答を、眞似る者さへある。所謂、橙黄橘紅を盛つた窪坏や高坏の上に、多くの揉烏帽子や立烏帽子が、笑聲と共に、一しきり、波のやうに動いた。中でも、最、大きな聲で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。

街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があつた。一人は、濃い縹の狩衣に同じ色の袴をして、打出の太刀を佩いた「鬚黒く鬢ぐきよき」男である。もう一人は、みすぼらしい青鈍の水干に、薄綿の衣を二つばかり重ねて着た、四十恰好の侍で、これは、帯のむすび方の、だらしのない容子と云ひ、赤鼻でしかも穴のあたりが、洟にぬれてゐる容子と云ひ、身のまはり萬端のみすぼらしい事、夥しい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛、後のは蘆毛の三歳駒で、道をゆく物賣りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から、又二人、馬の歩みに遅れまいとして隨いて行くのは、調度掛と舍人とに相違ない。――これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、こゝに斷るまでもない話であらう。

冬とは云ひながら、物靜に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる水の邊に、立枯れてゐる蓬の葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ、背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く、滑な日の光りを、うけて梢にゐる鶺鴒の尾を動かすのさへ、鮮にそれと、影を街道に落してゐる。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鵞絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡の山であらう。二人は、その中に鞍の螺鈿を、まばゆく日にきらめかせながら、鞭をも加へず悠々と、粟田口を指して、行くのである。

「どこでござるかな」手前をつれて行つて、やらうと仰せられるのは。」五位が、馴れない手に、手綱をかいくりながら、云つた。

「すぐ、そこぢや。お案じになる程遠くはない。」

「すると、粟田口邊でござるかな。」

「まづ、さう思はれたがよからう。」

利仁は、今朝、五位を誘ふのに、東山の近くに、湯の湧いてゐる所があるから、そこへ行かうと云つて出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真にうけた。久しく、湯にはいらないので、体中がこの間から、むづ痒い。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出来れば、願つてもない、仕合せである。かう思つて、予め、利仁が牽かせて来た、葦毛の馬に跨つた。所が、轡を並べて此処まで来て見ると、どうも、利仁はこの近所へ来るつもりではないらしい。現に、さうかうしてゐる中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口では、ござらぬのう。」

「いかにも、もそつと、あなたでな。」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないやうにして、静に馬を歩ませてゐる。両側の人家は、次第に稀になつて、今は、広々とした冬田の上に、餌をあさる鴉が見えるばかり、山の陰に消残つて雪の色も、仄に青く煙つてゐる。晴れながら、とげ〳〵しい櫨の梢が、眼に痛く空を刺してゐるのさへ、何となく肌寒い。

「では、山科辺ででもござるかな。」

「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ。」

成程、さう云ふ中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、関山も後にして、彼是、午少しすぎた時分には、とう〳〵三井寺の前へ来た。三井寺には、利仁の懇意にしてゐる僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になつた。それがすむと、又、馬に乗つて、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に当時は盗賊が、四方に横行した、物騒な時代である。――五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を

見上げるやうにして、訊ねた。
「まだ、さきでござるのう」
利仁は微笑した。悪戯をして、それを見つけられさうになつた小供が、年長者に向つて、するやうな微笑である。鼻の先へよせた皺と、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはふか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。
「實はな、敦賀まで、お連れ申さうと思うたのぢや。」笑ひながら、利仁は鞭を擧げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的皪として、午後の日を受けた近江の湖が光つてゐる。
五位は、狼狽した。
「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の――」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁の女婿になつてから、多くは、敦賀に住んでゐると云ふ事も、日頃から聞いてゐない事はない。が、その敦賀まで、自分をつれて行く氣だらうとは、今の今まで、思はなかつた。第一、幾多の山河を隔てゝゐる越前の國へ、この通り、僅二人の供人をつれただけで、どうして、無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人が、盗賊の爲に、殺されたと云ふ噂さへ、諸方にある。――五位は、歎願するやうに、利仁の顔を見た。
「それはまた、滅相な。東山ぢやと心得れば、山科。山科ぢやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一體どうしたと云ふ事でござる。始めから、さう仰せられうなら、下人共なりと、召つれようものを。――敦賀とは、滅相な。」

五位は、殆どべそを掻かないばかりになつて呟いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の欲望を煽動しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独り帰つて来た事であらう。

「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰めながら、嘲笑つた。さうして、調度掛を呼寄せて、持たせて来た壺胡簶を背に負ふと、やはり、その手から、黒漆の真弓をうけ取つて、それを鞍上に横へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に、盲従するより、外に仕方がない。そこで、彼は、心細さうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うろ覚えの観音経を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を、鞍の前輪に、すりつけるやうにして、覚束ない馬の歩みを、相不変とぼ／＼と

進めて行つた。

馬蹄の反響する野は、茫々たる黄茅に蔽はれて、その所々にある行潦も、つめたく、青空を映したまゝ、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑はれる。その涯には、一帯の山脈が、日に背いてゐるせいか、かがやく可き残雪の光もなく、紫がゝつた暗い色を、長々となすつてゐるが、これさへ蕭条たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。――すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。

「あれに、よい使者が参つた。敦賀への言づけを申さう。」

五位は利仁の云ふ意味が、よくわからないので、怖々ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるやうな所ではない。唯、野葡萄か何かの蔓が、灌木の一むらにからみついてゐる中を、一疋の狐が、暖か

な毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそり歩いて行く。』——と思ふ中に、狐は、慌たゞしく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。從者も勿論、遅れてはゐられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、戛々として、曠野の靜けさを破つてゐたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう、狐の後足を掴んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げてゐる。狐が、走れなくなるまで、追ひつめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものであらう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乘りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ。」利仁は、狐を、高く、眼の前へ、つるし上げながら、わざと物々しい聲を出してかう云つた。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ參つて、かう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の邊まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて參れ。』よいか、忘れるなよ。」

云ひ畢ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。

「いや、走るわ。走るわ。」

やつと、追ひついた二人の從者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍つて囃し立てた。落葉のやうな色をしたその獸の背は、夕日の中を、まつしぐらに、木の根石くれの嫌ひなく、何處までも、走つて行く。それが一行の立つてゐる所から、手にとるやうによく見えた。狐を追つてゐる中に何

岸の枯薄は、曠野が緩い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出てゐたからである。

「広量の御使でござるのう。」

五位は、ナイーヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ、頤使する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に、包容される自分の意志も、それだけ、自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。――阿諛は、恐らく、かう云ふ時に、最自然に生れて来るものであらう。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幇間のやうな何物かを見出しても、それだけで妄にこの男の人格を、疑ふ可きではない。

抛り出された狐は、なぞへの斜面を、転げるやうにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、ぴよいぴよい、飛越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すぢかひに、駈け上つた。駈け上りながら、ふりかへつて見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ、遠い傾斜の上に馬を並べて立つてゐる。それが皆、指を揃へた程に、小さく見えた。殊に入日を浴びた月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上つてゐる。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のやうに、走り出した。

一行は、予期通り翌日の巳時ばかりに、高島の辺へ来た。此処は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇つた空の下に、幾戸

の茅屋が、疎にちらばつてゐるばかり、岸に生へた松の樹の間には、灰色の漣漪をよせる湖の水面が、磨くのを忘れた鏡のやうに、さむざむと開けてゐる。――此処まで来ると利仁が、五位を顧みて云つた、
「あれを、御覧じろ。男どもが、迎ひに参つたげでござる。」
見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨つたのもあり、徒歩のもあり、皆水干の袖を、寒風に翻へして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで来る。やがてこれが、間近くなつたと思ふと、馬に乗つてゐた連中は、慌たゞしく、鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞して、いづれも恭々しく、利仁の来るのを、待ちうけた。
「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう。」
「生得、変化ある獣ぢやて、あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ。」

五位と利仁とが、こんな話をしてゐる中に、一行は、郎等たちの待つてゐる所へ来た。「大儀ぢや。」と、利仁が声をかける。蹲踞してゐた連中が、忙しく立つて、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽気になつた。
「夜前、稀有な事が、ございましてな。」
二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色の水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ来て、かう云つた。
「何ぢや。」利仁は、郎等たちの持つて来た、酒肴や破籠を、五位にも勧めながら、鷹揚に問ひかけた。
「されば、でございまする。夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失ひなされましてな。『おのれは、阪本の狐ぢや。今日、殿の仰せられた事を、言伝てせうほどに、近う寄つて、よう聞きやれ。』と、かう仰有るのでございま

する。さて、一同がお前に参りますると、奥方の仰せられまするには、『殿は今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ。』と、かう御意遊ばすのでございまする。」
「それは、又、稀有な事でござるのう。」五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、両方に満足を与へるやうに、相槌を打つた。
「それも唯、仰せられるのでは、ございませぬ。さも、恐ろしさうに、わな〳〵とお震へになりましてな、『遅れまいぞ。遅れゝば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ。』と、ひつきりなしに、お泣きになるのでございまする。」
「して、それから、如何した。」
「それから、多愛なく、お休みになりましてな。手前共の出て参りまする時

にも、まだ、お眼覚にはならぬやうで、ございました。」
「如何でござるな。」郎等の話を聞き完ると、利仁は五位を見て、得意らしく、云つた。「利仁には、獣も使はれ申すわ。」
「何とも驚き入る外は、ござらぬのう。」五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたやうに、口を開いて見せた。口髭には、今、飲んだ酒が、滴になつて、くつついてゐる。

———

その日の夜の事である。五位は、利仁の館の一間に、切燈台の灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまじ〳〵して、明してゐた。すると、夕方、此処へ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにほひ

さう云ふ考へが、一つづつ、五位の心に、浮んで來た。同時に、雀色時の靄の中を、やつと、この館へ辿りついて、長櫃に起してある、炭火の赤い焔を見た時の、ほつとした心もちも、――それも、今、かうして、寢てゐると、遠い昔にあつた事としか、思はれない。五位は綿の四五寸もはいつた、黄いろい直垂の下に、樂々と、足をのばしながら、ぼんやり、われとわが寢姿を見廻した。

直垂の下には利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて、着こんでゐる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やつた、酒の醉が手傳つてゐる。枕元の蔀一つ隔てた向うは、霜の冴えた廣庭だが、それも、かう陶然としてゐれば、少しも苦にならない。萬事が、京都の自分の曹司にゐた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも關はらず、我五位の心には、何となく釣合のと

れない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けると云ふ事が、――芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、來てはならないやうな、心もちがする。さうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な變化から來る、落着かない氣分が、今日の天氣のやうに、うすら寒く控へてゐる。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘ひさうもない。

すると、外の廣庭で、誰か、大きな聲を出してゐるのが、耳にはいつた。聲がらでは、どうも、今日、途中まで迎へに出た、白髮の郎等が何か告れてゐるらしい。その乾からびた聲が、霜に響くせいか、凛々として、凩のやうに、一語づつ、五位の骨に、應へるやうな氣さへする。

「この邊の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるゝには、明朝、卯時までに、切

口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各、一筋づゝ、持つて参る様にとある。忘れまいぞ、卯時までにおぢや。」

これが、二三度、繰返されたかと思ふと、やがて、人のけはひが止んで、あたりは、又元のやうに、静な冬の夜になつた。その静な中に、切燈台の油が鳴る。赤い真綿のやうな火が、ゆら／＼する。五位は欠伸を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽り出した。――山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする気で、持つて来させるのに相違ない。さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで、忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に帰つて来る。殊に、前よりも、一層強くなつたのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと云ふ心もちで、それが、意地悪く、思量の中心を離れない。どうもかう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて、現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して、待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ。出来る事なら、何か突然故障が起つて、一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云ふやうな、そんな手続きに、万事を運ばせたい。――こんな考へが、「こまつぶり」のやうに、ぐる／＼一つ所を廻つてゐる中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐつすり、熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先の部屋の蔀をあげて見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時をすぎてゐたのであらう。広庭へ敷いた、長筵の上には、丸太のやうな物が、凡そ、二三千本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかへる程、山のやうに、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長

さ五尺の、途方もなく大きい、山の芋であつた。

五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い、驚愕に襲はれて、呆然と、周囲を見廻した。廣庭の所所には、新しく打つたらしい杭の上に、五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女が、何十人となく、そのまはりに動いてゐる。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶に、「あまづらみせん」を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまはる程、忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残つてゐる明方の靄と一つになつて、廣庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩めた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焔ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの悉く、戦場か火事場へでも行つたやうな騒ぎである。五位は、今更のやうに、この巨大

な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考へた。さうして自分が、その芋粥を食ふ為に、京都から、わざ〳〵、越前の敦賀まで旅をして来た事を考へた。考へれば考へる程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、實に、此時もう、一半を減却してしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や舅の有仁と共に、朝飯の机に向つた。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみ〳〵と海の如くたゝへた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それから、それを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へ、すくつては入れ、すくつては入れする

のを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のにほひと、甘葛のにほひとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に對した時、まだ、口をつけない中から、既に、滿腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であらう。――五位は、提を前にして、間の惡さうに、額の汗を拭いた。

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下され。」

舅の有仁は、童兒たちに云ひつけて、更に幾つかの銀の提を机の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつてゐる。五位は眼をつぶつて、唯でさへ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくつて、いや〳〵ながら、飲み干した。

「父も、さう申すぢやて。平に、遠慮は御無用ぢや。」

利仁も側から、新な提をすゝめて、意地惡く笑ひながらこんな事を云ふ。弱つたのは、五位である。遠慮のない所を云へば、始めから芋粥は、一椀も吸ひたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、さうかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をねぶつて、殘りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は、一口も吸ひやうがない。

「何とも、忝うござつた。もう、十分頂戴致したて。――いやはや、何とも忝うござつた。」

五位は、しどろもどろになつて、かう云つた。餘程弱つたと見えて、口髭

にも、鼻の先にも、冬とは思はれない程、汗が、玉になつて、垂れてゐる。
「これは又、御少食な事ぢや。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それ〱その方ども、何を致して居る。」
童児たちは、有仁の語につれて、新な提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、兩手を蠅でも逐ふやうに動かして、平に、辭退の意を示した。
「いや、もう、十分でござる　——失禮ながら、十分でござる。」
もし、此時、利仁が、突然、向ふの家の軒を指さして、「あれを御覽じろ」と云はなかつたなら、有仁は猶、五位に、芋粥をすゝめて、止まなかつたかも、知れない。が、幸ひにして、利仁の聲は、一同の注意を、その軒の方へ持つて行つた。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしてゐる。さうして、その

まばゆい光に、光澤のいい毛皮を、洗はせながら、一疋の獸が、おとなしく、坐つてゐる。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。
「狐も、芋粥が欲しさに、見參したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」
利仁の命令は、言下に、行はれた。軒からとび下りた狐は、直に、廣庭で芋粥の馳走に、與つたのである。
五位は、芋粥を飮んでゐる狐を眺めながら、此處へ來ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されてゐる彼である。京童にさへ「何ぢや。この鼻赤めが」と、罵られてゐる彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない尨犬のやうに、朱雀大路をう

自分は「羅生門」以前にも、幾つかの短篇を書いてゐた。恐らく未完成の作をも加へたら、この集に入れたものの二倍には、上つてゐた事であらう。當時、發表する意志も、發表する機關もなかつた自分は、作家と讀者と批評家とを一身に兼ねて、それで格別不滿にも思はなかつた。尤も、途中で三代目の「新思潮」の同人になつて、短篇を一つ發表した事がある。が、間もなく「新思潮」が廢刊すると共に、自分は又元の通り文壇とは緣のない人間になつてしまつた。

それが彼是一年ばかり續く中に、一度「帝國文學」の新年號へ原稿を持ちこんで、返された覺えがあるが、間もなく二度目のがやつと同じ雜誌で活字になり、三度目のが又、半年ばかり經つて、どうにか日の目を見るやうな運びになつた。その三度目が、この中へ入れた「羅生門」である。その發表後間も

なく、自分は人傳に加藤武雄君が、自分の小說を讀んだと云ふ事を聞いた。斷つて置くが、讀んだと云ふ事を聞いたので、褒めたと云ふ事を聞いたのではない。けれども自分はそれだけで滿足であつた。これが、自分の小說も友人以外に讀者がある、さうして又同時にあり得ると云ふ事を知つた始である。

次いで、四代目の「新思潮」が久米、松岡、菊池、成瀨、自分の五人の手で、發刊された。さうして、その創刊號に載つた「鼻」を、夏目先生に、手紙で褒めて貰つた。これが、自分の小說を友人以外の人に批評された、さうして又同時に、褒めて貰つた始めである。

爾來程なく、鈴木三重吉氏の推薦によつて、「芋粥」を「新小說」に發表したが、「新思潮」以外の雜誌に寄稿したのは、寧ろ「希望」に掲げられた「虱」を以て始めとするのである。

自分が、以上の事をこの集の後に記したのは、これらの作品を書いた時の自分を幾分でも自分に記念したかつたからに外ならない。自分の創作に對する所見、態度の如きは、自ら他に闡明する機會があるであらう。唯、自分は近來ます／＼自分らしい道を、自分らしく歩くことによつてのみ、多少なりとも成長し得る事を信じてゐる。從つて、屢々自分の頂戴する新理智派と云ひ、新技巧派と云ふ名稱の如きは、何れも自分にとつては寧ろ迷惑な貼札たるに過ぎない。それらの名稱によつて概括される程、自分の作品の特色が鮮明で單純だとは、到底自信する勇氣がないからである。

最後に自分は、常に自分を刺戟し激勵してくれる「新思潮」の同人に對して、改めて感謝の意を表したいと思ふ。この集の如きも、或は同人の名によつて――同人の一人の著作として覺束ない存在を未來に保つやうな事があるかも知れない。さうなれば、勿論自分は滿足である。が、さうならなくとも亦必ずしも滿足でない事はない。敢て同人に謝意を寄せる所以である。

大正六年五月

芥川龍之介

目次

阿蘭陀書房新刊書

近刊

北原白秋氏著及畫　雀の卵

水野葉舟氏著　聖書物語

中澤弘光氏 森脇忠氏著及畫　スケッチの描き方

農學士細川文五郎氏 大矢好治氏著　家庭園藝 草花の作り方

ロマン、ローラン著 大杉榮氏譯　民衆藝術論

千葉花明氏著　日本仇討物語下巻

大正六年五月十八日印刷
大正六年五月二十三日發行

定價金壹圓

著作者　芥川龍之介
東京市麹町區有樂町一丁目三番地

發行者　北原義雄
東京市京橋區[illegible]二丁目二十一番地

印刷者　坂本楠吾
東京市京橋區[illegible]二丁目二十一番地

印刷所　國光印刷株式會社

發行所　阿蘭陀書房
東京市麹町區有樂町壹丁目參番地
電話本局 一一二三番 三〇九二番 五二五六番
振替東京 一四四八九番